

始



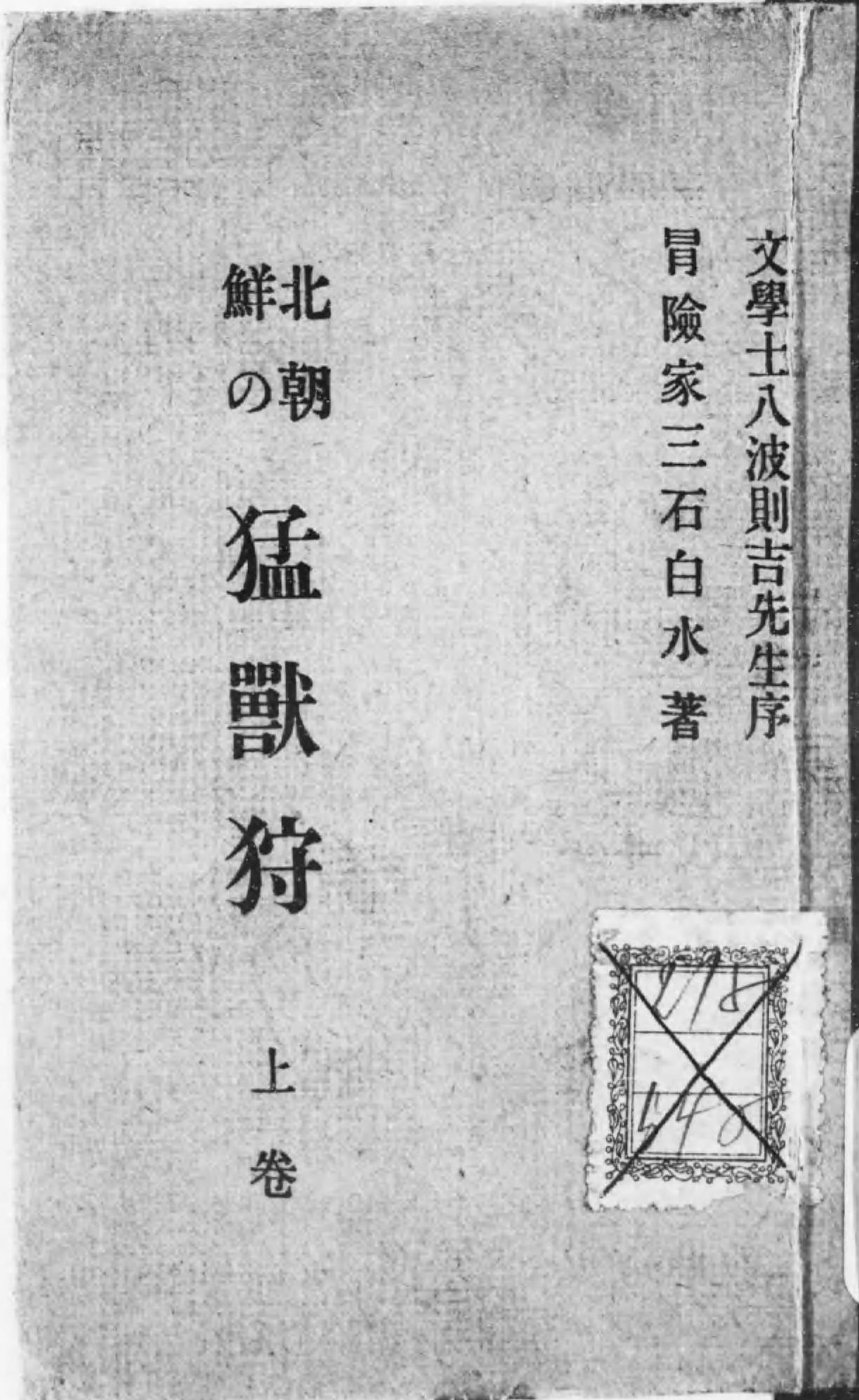
文學士八波則吉先生序

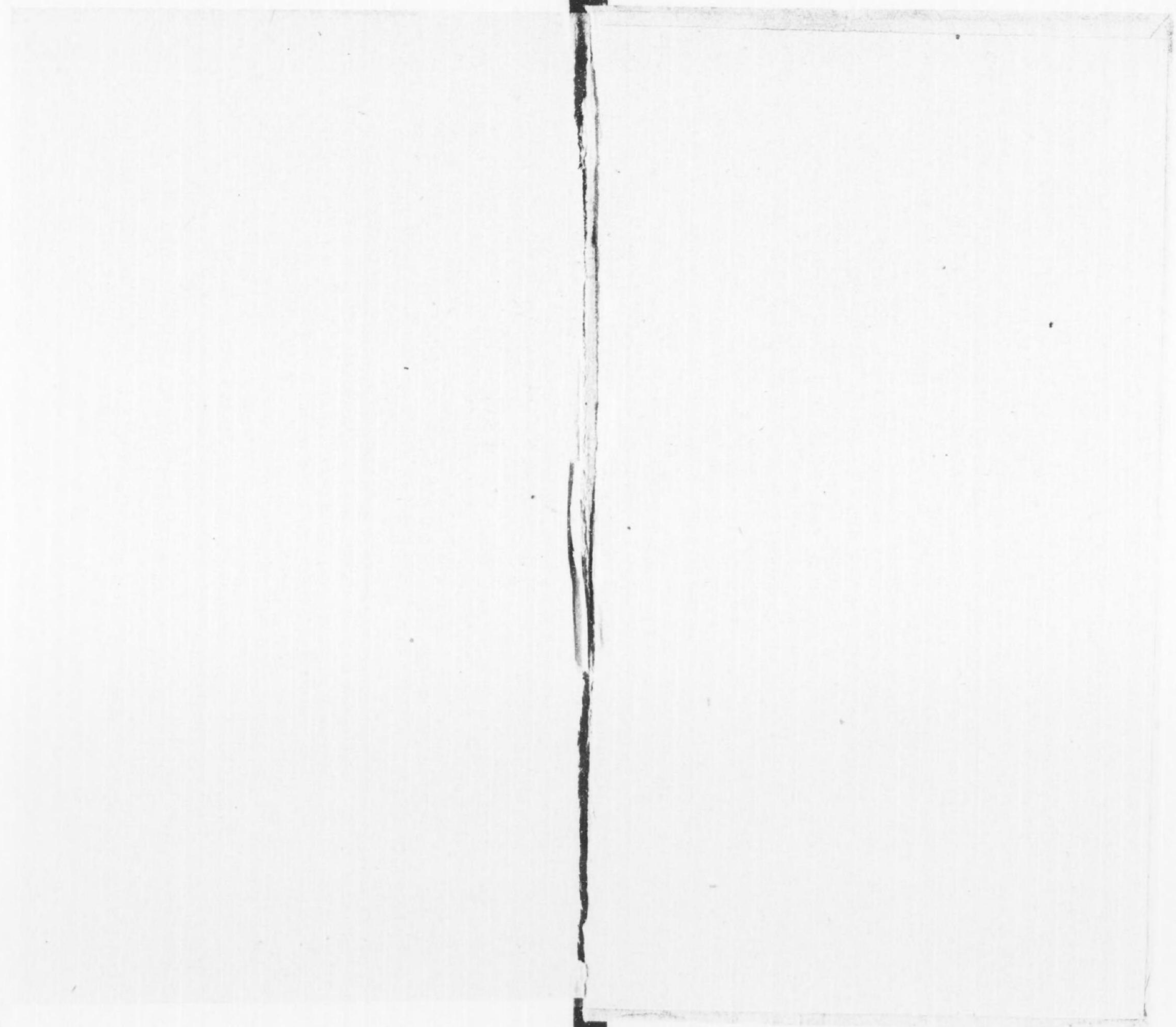
冒險家三石白水著



北朝
の
猛獸狩

上卷





110
456

序

余一日三石白水氏の猛獸狩談を四高の
 至誠堂裡に聽く。愉絶快絶いはゆる血湧
 き骨鳴るの感ありき。以爲らく以て
 を起たしむるに足ること。
 氏來つて一巻を出し閱を請ふ、曩日聽
 く所の猛獸狩談の原稿なり。筆路縦横、
 内容の壯烈なるに恰適す。氏は腕の人に

正儒夫
 大 2. 内交
 曩日聽

して口の人、口の人にして又筆の人なり
蓋し分銅の人なればなるべし。

文中間々破格の調ありといへども、之
を正せば却て生氣を減ぐの憾あり。文法
は末也、

文は人なり、乃ち十の一二にして校閲の
筆を擱きぬ。

本書を讀む者、水滸傳的架空談となす

こと勿れ。著者の頸には現はに熊の爪迹
あり、著者の腹には明かに豹の牙痕を印
す。氏は現時の快男子なり、偉丈夫なり。
以て序となす。

大嘗祭の日

其月生

緒

顧れば、韓山の野に猛虎を逐ふてより、既に四星霜、日月私に照らし給はねど、白水武運拙なくして、第四回の猛獸狩を企て、去年九月、暹羅及印度地方に向けて、遠征の途に上らんとするや、偶々歐洲の大戦亂は、我東洋に波及して、日獨の國交斷絶し、我軍幸に膠州灣頭利を收めて、凱旋すと雖も、白水亦軍籍に在り、當時所屬師團より、三週間禁足の命令に接し、剩

へ銃器彈藥は戦時禁制品として、海外に携帶するを許されず、徒らに恨を吞んで、孤劍瓢零として、關山幾重の間に定めなき、生を營む幾ヶ月ぞ

翻つて我輩猛獸狩の意義を想へば、慨はしき現代社會の時流に義憤して、青年の元氣意氣を振作し、國家將來の運命を双肩に擔へる青年の反省を促がし、益々國運の隆盛を計らんとするの微意に外ならず

見よや、皮相なる社會の發達と、物質的文明の餘波とは、世を擧げて墮落せしめ、待合の小座敷に、數千金を投じて、醜業婦一夜の春を買へる紳士あるを耳にしたるも、未だ白面の書生に十金を與へたる紳士あるを耳にせず、俳優に溺れて、痴蝶長春の夢を貪る令夫人あり、未亡人あり、甚だしきは 陛下の肱股たる帝國の軍人にして、國を賣らんとする不忠の臣あり、其他良家の少女にして公園の月に歩するものあれば

國家の柱石人生の花と謳はるる、一國の青年學生等にして、又徒らに、脂粉を事とし、新聞紙上の第三面に、醜名を流す者あり、見來れば現代の風俗、落花狼籍の迹ならざるなし、

抑も青年の元氣は、國家の元氣なり、詢に元氣は青年の生命にして、また國家の生命也唯女の尻を追ひ廻はすを以て、能事と心得居るが如き、現代の青年、市井の青瓢箪共等は確かに天下の穀潰しなり

白水生まれて廿九年、曾て女に惚れもせず惚
れられもせぬ武骨者、弓矢取る業は知れども、
筆取る術は知らず、而して此一巻を物す、冀く
は微衷を酌め

金澤の客舎に於て

白水識

目次

▲猛獸狩の首途……………	一頁
▲思はぬ應援……………	九頁
▲近來の大失敗……………	三頁
▲猛虎の足跡發見……………	一九頁
▲雪中血痕淋漓……………	二五頁
▲一日温突に籠城……………	三一頁
▲單身再擧を企つ……………	三五頁
▲人犬共に雪を泳ぐ……………	四〇頁
▲遂に猛虎を斃す……………	四七頁
▲猛穴に臥して虎の歸りを俟つ……………	五五頁

- ▲摩天嶺上の白虎を探る……………六五頁
- ▲愛犬非命の最後……………七七頁
- ▲獵犬を贈らる……………八一頁
- ▲雄基嶺上狼の晝寢……………八七頁
- ▲飯の曲喰ひ……………九二頁
- ▲怪僧に出逢ふ……………一〇二頁
- ▲坊主の大妙計……………一〇九頁
- ▲八百年前の古城址……………一三三頁
- ▲支那兵乱暴を挫ぐ……………一三八頁
- ▲第二の猛虎を斃す……………一三六頁
- ▲勇躍して出發す探見の首途……………一四九頁

- ▲彈丸の鏑にしてやる……………一五〇頁
- ▲大風雨の無人境……………一五三頁
- ▲群狼に包圍さる……………一五九頁
- ▲白頭山麓に達す……………一六三頁
- ▲白頭山頂を究む……………一六九頁
- ▲熊二頭を屠る……………一七六頁
- ▲豹と格闘す……………一八二頁

● 猛獸狩の首途

學友先輩の諸氏に見送られて、朝鮮の山野に猛虎狩りの爲め、一挺の銃身に生死の運命を托して、明治四十三年師走廿七日午後三時、年末の忙はしげなる旅客等に伍して、風寒き新橋の停車場を出發した。

「健康と成功を祈る」

「シツカリやつて來給へ」

「御機嫌よう」

と口々に呼ばはる聲を聞きながら、心なき瀛車は、家を忘れ妻に別れて物々しく武装せる、一個の壯漢を乗せて、抑も何れにか向はんとする？、

函嶺の雲は深く鎖して、天の彼方に鏤めたるが如き星は、瞬きくくして、我身の上を氣遣ふものの如く、車の外は唯風の音のみ聞ゆ。

所在なさに幾度か眠り、幾度か覺めし翌廿八日午後六時、下之關驛に着す、準備の爲め滞在する三日間、三十一日午後

九時、關釜連絡船會下山丸にて釜山に向ふ。

翌くれば、坤輿一轉して、洋々たる玄海の波も靜かに、旭日東天に新なる、元旦の初日出の影を、船上に拜し午前九時釜山に着く。

屠蘇三杯の酒の香に酔へる、鮮人等の容姿も眼に新らしく朝鮮の風物悉く物珍らし。

各官廳に、手続きを要す可き事多かりしも、休暇の爲め止むを得ず、四日までは手鍊の銃に磨きをくれて、大池旅館の

樓上に、悠々として眠りを貪る。

四

四日手續きを了へて、五日午後十時、北朝鮮初廻航の安平丸に搭乗して、元山津に向ふ、船は二晩一日を走りて、七日午前七時、檢疫船を待つ間、元山港外に假泊す。

先づ船室より甲板に出で、北朝鮮の山々を見廻せば、疊々たる連峰峻嶺、巍然として雲に聳え、而も昨年十一月唯一回降り積みしと云ふ雪は、此等峻嶺を悉く包みて、白皚々たり吁!!彼の直白に包まれたる連山の間、猛虎奈何に嘯きつつ

我れを俟つかと思へば、満身の血、血管を逆流して、鐵腕亦爲めにリュウ／＼と唸りを生ず、此五尺の軀、一塊の肉、一滴の血潮と雖も、雷に彼の異郷の雪を染めたるのみにては、斷じて歸らる可き我身にあらず、尠なくとも猛虎五頭を獲るにあらずんば、死すとも歸らじと決心した。

間もなく船は檢疫を終りて、元山の棧橋に横付けとなる。同窓の友、元山毎日新聞社長西田常三郎氏に出迎へられ、嬉しき言葉の數々を頂戴しながら、旅亭大東館に入る。翌八

五

六
日元山の官民十數氏、吾輩の爲めに、特に料亭東洋軒に招宴
を張る、元山警察署長是澤氏曰く。

『由來朝鮮は天然痘流行の地なれば、君先づ第一に種痘を
施さざる可らず』

と、此に於て我輩醫師某氏の許に種痘に行く。

先生如何に感ずつたか、吾輩の双腕に廿四個の種痘を施す、
而も我輩物心地付いて以來、曾て種痘したる事なし、爲めに
効驗忽ちに顯はれ、發熱甚だしく、遂に病みて廿五日まで病

床に輾轉して、徒らに脾肉の嘆に堪へず。

廿六日、病床を蹴つて起つ、頑健舊に復し身は恰も金石に
似て、打てば鏘々たる響あり、直ちに武装を嚴にして元山を
發す。

此日暗雲低く天を鎖ざして、正午頃よりは降雪霏々、何時
降り止む可しとも思はれず、爲めに陽日里に一泊す、廿七日
は雪の山路を高原まで辿り、廿八日漸くにして永興邑に着く
此日もまた風寒く、空模様何となく險惡なりしが、果せる

哉、夜に入りて雪となる。

八

降るワ降るワ癡猛に降り積む事三晝夜、三十一日朝に至りて降り止む、永興邑内の積雪約四尺と註せらる、我輩雀躍して欣び、是れ實に天興の絶好機也、今の間に猛虎の足跡を見出さば、撃ち取る事も至難の業にあらざる可しと、直ちに結束して、單身孤銃を提げ、雪を蹴立てて飛出さんとする一刹那。

● 思はぬ應援

揃ひも揃つた雲突くばかりの大男、足拵らへも嚴重に、腰には朱鞘の大刀を横たへ、村田式廿八番銃を肩にして

『お早う御座います、私共は當地の秋元黒鉛會社に居る、江島竹原と申すものでありますが、今朝貴君が虎狩りに行かると言ふ事を聞きまして、是非に共を致し度推參致しましたが如何で御座いませう』

世には數寄者も、あればあるものかなと思ひながら、

九

『折角の御厚意ですが、實は東京出發の折、父からの申聞
けも御座いますので、御斷り申し上げます』

『さうですか、然し折角仕度までして來たのですから、お
供は願ひませんまでも、勝手にお後に隨いて行きます、
左程お邪魔にもなりますまいから』

此意外なる返答には、流石の我輩も面喰つた、到底一所に
往かねば、止む可くもあらぬ、彼等の決心、此に於て兎も角
も一所に出掛ける事に決した、此思ひも掛けぬ應援の人々と

共に萬事遺憾なき用意を整へて、同勢八人、道を東北に取り
巍々たる峻嶺に向つて發足した。

嶺は、一步は一步よりも急に、雪も亦深くして、時に乳下に
及ぶ、進退爲めに自由を缺き歩行意の如くならず、健脚常に
同人間に誇りとせる我輩も、永興を距る僅かに五里餘、東下
里に着きて、日はハヤ暮れぬ。

一行は或る鮮人家屋に宿を求め、僅かに三疊敷ばかりの狭
苦しき一室に、ドヤ／＼入り込み、簡單に夕餉を濟ませて、

着のみ着のまま、ゴロリ／＼と横になる、疲勞の夢に入らんとするや何事ぞ、鮮人家屋の特産物とも稱すべき南京虫と虱の一家一族等、遠慮會釋もあらばこそ、其眷族郎覺を引連れたの攻撃に、幾度か夢破られて、安き眠りを取る間もなく、夜はホノポノと明け放れた。

『オイ君等眠れたか』

『眠れるものか、南京虫と虱で閉口した』

と眠むさうな眼を擦り／＼言ふ。

『然し君、鮮人等平氣の平左で眠つて居つたが何ともないだらうか』

『夫りや君、彼奴等生れて以來湯浴み一つした事のない代物だから、軀中垢に汚れて、皮膚の上には一分位宛層を爲して居るよ、到底南京虫や虱の斧位では、皮膚まで通るまいアハ……』

● 近來の大失敗

笑び興じつつある間に、我輩聊か催し物がして來た、便所

もがなと其附近を尋ね探がした見當らぬ、風雲愈々急なるに及んで、漸々雪掻分けて、裏手に廻れば、キビカラ圍ひの粗末な小屋、雪に埋まりて、上部三尺ばかり顯はれて居るを見出した。

ウム之れだ之れだと打喜びて、中に這れば一個の瓶地中深く埋めて其上に蓋までしてある。

『イヤア中々のハイカラだ』

と先づ蓋を取れば得も言はれぬ臭氣紛紛として鼻を撲つ、悠

々と跨りて、累々とやつて退け、

『ア、好い心持ち』

と獨言しながら、再び蓋をして立戻り、通譯に向ひ。

『此家の便所はハイカッて居つたぜ、瓶を深く埋めて、其れに蓋までしてあつた』

と話すと通譯先生眼を丸くして、

『旦那鮮人の家には便所がありませんよ』

『ナニ便所がない、便所がなけりや何處へするんだ』

「此邊に（屋外を指しながら）やつて置けば犬や豚が喰つて行きます」

「オイ／＼そんな汚ない話しは止して、今僕のやつて来た所を一寸見て来いよ」

「さうですか……………」

雪掻き分けし我輩の足跡を付けて出て行つたかと思ふと、暫くして彼は顔色變へて戻つて来た。

「旦那大變ですよ、ありや便所ぢやありませんぜ」

「便所でなけりや、ナンだね」

「アリヤ旦那鮮人等が一年間喰ふ爲めに、漬けてある香の物です」

「ナニ香の物だッ」

一同ワツとばかりに大笑ひ、此近來の失敗には思はずも痛快を叫んだ、通譯は猶ほも話しを續けて、

「今朝此所にマゴ／＼して居ると、彼の中から出して来て喰せられますよ」

「オイ堪まらん堪まらん、出掛けよう」

と直ちに宿賃を支拂ひ、漬物の損害賠償として、金幾干を紙包にした儘、北へ北へと逃げて行き、やう／＼北放れの一軒家まで逃げ延びて朝餉を済ます、かくて一行は愈々之れから大探索大猛襲だつと、銃身も碎けよと握り占め、出掛けようとした時、此家の主人、

「昨夜、彼の山に虎が出て獐を喰つて行きました」

と耳寄りの話を聞いた一行は、雀躍して勇み立ち、好矣其虎

こそ我銃の弾丸に掛けて、功名するは此時也と、意氣既に戦はざるに、猛虎を呑むの概を示した。

▲猛虎の足跡發見

此に於て作戦 計画違算なく、吾輩と江島氏とは、其虎に向つて正面攻撃の任に當り竹原氏と朝鮮獵師とは其裏手、即ち搦手攻撃の任に當り、一舉して猛虎と雌雄を決せんものと、陣客堂々降り積める雪も何のものかは、健脚に鞭打ちて突進した、行く事約七八丁、山の端に差懸るや、果せる哉、大

なる猛虎の足跡。

「占めたツ、居るぞツ」

「占めたツ」

二人は同時に叫んだ、直ちに追撃ツと見上ぐれば、峻嶮譬ふるに物なく、巍然として天に聳ゆる大天嶮。

されど敵眼前に在り、此大嶮山も何のものかは、今は一時も猶豫すべきに非ずと、或時は巖角、木の枝を命の綱と頼みながら攀ち上つた。

漸く絶頂に達して、後見返れば朝鮮獵師と竹原氏とも此足跡を追求し來る、余等は絶頂に待ち合はして、一行四人、山また山谷また谷と、只四顧茫茫たる積雪の間を約一里半程追跡すれば、

不思議ツ!!

虎の足跡は消ね失せた、餘りの不思議に鮮人獵師を顧みて、

「オイ不思議ぢやないか、足跡がなくなつて仕舞つたぞ」
と問へば、鮮人獵師は、沈着いた態度で、

『旦那、虎と言ふ奴は鼻はありますが役に立ちませんが、爲めに非常に用心深い奴ですから、雪の時などは元來た道を、また元のやうに戻つて行きます、多分さうして戻つたものでしょう』

との事に、仔細に足跡を點檢すれば、ごうやらさうらしき形跡……………。

足跡の消失に、失望一方ならざりし一行も、朝鮮獵師の説明を、聞くに及んで勇氣百倍し、再び元來た道を取つて返へ

す、恰度初めて足跡を見出したる所より、約八九丁も先きに於て、右手に分れし足跡を見出したが、最早や既に日暮れであつたので、再び東下里の一軒家に一泊した。

翌朝言ひ合はさねど、今日こそは如何に猛虎千里の藪を越す速力ありとも、ヤハカ撃ち逃がす事のある可き、我銃の錆となさでは置く可きかと、一行の決心面に表はし勇氣凜烈、意氣實に衝天の勢を以て、再び其追撃に移る。

されど、山は愈々峻はしくて、雪は益々深く、一行の困難

實に名状すべくも非ず、幾度か轉げつまるびつ、互に相助け相誠めて、漸々西上里に着く、日漸く西に傾く、一行は西天を眺めて、

『ア、今日も暮れたか』

『勝負は明日の事だ』

『畜生ドコ迄往つたつて撃ち取らずに置くものか、大丈夫だよ』

互に慰められつ慰めつ、一夜を明かす午前五時一同ガバと

跳ね起き、直ちに結束して、今日こそはど口には出さねど、鉄腕を撫して山の彼方を眺め各決心の臍を固む。

咸鏡南道唯一の大嶮山五峰山目蒐けて、突き進む。

▲雪中に血痕淋漓

道が頑健常に誇り、健脚並びなしと稱せられし一行も、雪深き山路に惱み逐に目的地點に達する能はず、五峰山麓に着きて、日は暮れた、一行は失望と落膽とに、漸く怨嗟の聲を洩らすに至つたのも決して無理でない、日一日と疲勞を増せ

る軀からだの瘦やせさへ、お互たがひに目に見ゆる、然し一行の元氣は頗すこぶる旺盛せいであつた。

「ア、また今日も駄目か……」

「ナニ明日は大丈夫だよ、モ―此山に居る事がチャンと解つて居るんだから……」

「さうかも知れんテ、此山より外に逃げて行きさうな所もないからネ」

他愛もなく話しながら、明日の策戦に餘念なき折柄、側より

は雷らいの如き駟聲かんせい起る。

好矣、今日こそは此身このみ休たふるるか、猛虎まうこを休たほすか、其一そのを選ねらばざる可べらずと一行は未明みめいより五峰山ごほうさん目め蒐かけての大猛襲だいまうしゆ!!、最初さいしょの中うちはお互たがひに相あひ助たすけつ相あひ誠いましめつして、登山とうざんしたれど、餘あまりに雪の深ふかきと、峻峻けんけんなる山坂路やまのぼりとに隔へだてられ、各勝手かくかつてに徑みちを選ねらびながら、別わかれ別わかれに登山とうざんした、午後一時頃我輩われら愈々絶頂てつていに達たして、見るともなしに一行は何處どこぞと、見廻みまわしながら谷一つ隔へだてし、三川山麓さんせんに眼めを移うつせば、思はざりき一頭ひとつの大

猛虎!!

二八

東より西に三川山麓を斜に横切らんとするを見出さんとは
!

オ、此四五日汝の爲めに。如何に苦しみ抜きしぞ、今は思
ひを晴らす可き時節到來せり、イデヤ此銃の弾丸を喰ツてク
タバレッツと、手鍊の銃を押取り上げ、狙ひ定めて一發ズトン
と火蓋を切る一刹那、高山の常として雪を捲ひて吹き起れる
谷風は、吹雪と化して黑白も分かず、されど引金引かんとす

る突嗟の出來事、間髪をも入れざる間に、切つて放つた弾丸
は、山に唸りて確かに手答あり、

『占めたッ』

と喜ぶ間に、吹雪は晴れたれど虎の影だに見えず、蓄生撃ち
洩らせしか残念ツと、用意の呼笛を吹き鳴らして、一行を呼
び集め、ありし次第を物語れば、

『ヨシ、ではさう遠くへは行くまい、急追撃だッ』

飛ぶが如くに山を走り降る、三川山麓は落花狼籍、無残にも

二九

雪を蹴散らして、走れる猛虎の足跡と、所々に生々しき血潮
滴りを見た、一行は愈々勇氣百倍し、

『コリヤ彈丸を喰つて逃げて居るぞ、さう遠くまでは往く
まい、追かけろ追かけろ』

『さうだ急げッ、急げッ』

血を見て勇んだ一行は、修羅王の暴れたるが如く、乳下に
及ぶ大積雪を物ともせず、勇往躍進、追撃に次ぐに追撃、愈
々益々急を加へて、息をもつかず雪を蹴立てて追ひ捲くれど

、冬の日脚の知くて、暮色漸く蒼然たる頃、方池里に着く。

▲一日の温突籠城

二月九日、疲勞と失望とに、前後も不覺に眠つた一行は、
昨夜ばかりは南京虫の攻撃も、左程に痛苦を態せず、午前五
時起き出て見れば何事ぞ、朝鮮名物の雪は、霏々として降り
頻り、到底面を向く可くもあらず。

『駄目だ、此大雪ぢや』

『蓄生ツ命冥加のある奴だなア』

『仕方ないサ今日は一日温突籠城して大に活然の氣を養ふ
サ』

『然し此儘に温突籠城も癢に觸る、誰れか住かんか、其邊
で雉子でも取つて来て、朝鮮酒でも飲まう』

精悍なる竹原氏は銃を肩にして出掛ける、我輩と江島氏と
は裏手の山に、鹿を撃つ可く朝鮮獵師と通譯とは野菜の徵發
に、思ひ思ひに手配して、今日一日の雪籠城に、大に數日來
の疲勞を醫さん計画、我輩と江島氏とは、約三時間ばかりに

して雪中の狩立て、空しからず、獐一頭を撃ち止め、意氣揚
々として、引き返せば、續いて竹原氏の朝鮮雉子四五羽を撃
ち取りて戻り來り、

『どうだ君、我輩なぞのする事は、斯の通りだ、一人で一
羽宛ありや澤山だらう』

鼻高々と大意張り、

『オイ々々此方の獲物を見てからにせよ』

『ヤア鹿か………道理でボンボン音がすると思つた、ヨシ

鹿の刺身に雉子の焼肉だ』

三四

獨言しながら料理方を始める。

鮮人家屋に雪見の宴、到底常人等の夢想だに能はざる感興湧然たり、竹原江島の両氏が、朝鮮酒に舌鼓打つて、頻りに鬱を晴らしながら、素人獵師自分免許の天狗話しに怪氣焰を上げる、我輩は元來の下戸黨、酒の香に酔ひながら御馳走を頰張る、無論鮮人獵師と通譯とは遺憾なく鮮人根性の發揮に餘念なく、喰ふ飲む歌ふの大騒ぎ、是れが昨日まで戎衣の雪は

氷と化す鐵の如き嚴寒に、猛虎を逐ひし勇士かと思へば、サ
テも……………

此家創立以來の大陽氣に、附近の鮮人共を、眼を丸くして驚かせし大騒ぎも、夜の幕の下りると共に、何時しか酔ひ潰ぶれし連中等の高甗と化す、外は依然として何時降り止む可しとも思はれぬ大雪、既に積むで尺を越ゆ。

▲單身再舉を企つ

雪の朝は、紺碧恰も拭ふが如き好天氣に、一同ガバと跳ね

三五

起きたれど、悲しい哉、九日夜來の降雪に、猛虎の足跡悉く埋りて、其行衛を探索すべき手段もなし、剩へ永興以來の糧食飲乏を來たして、今日一日保ち難からんとの話なり、一行は無念の涙に、齒を噛み鳴らし霏々として降りしきる此雪は消ゆるとも、遺恨十年猛虎を逸したる怨み、永久に消えやらぬ、方池里を後に三川山麓を睨んで、永興の町に引上げた、お互に残念残念の聲を連發しながら……

然し元來片意地張つた我輩の瘦我慢の角が承知せぬ、苟も

我輩の銃に掛けて撃ち損じたと言はれては、銃の手前故國の知己朋友に對して、何の面目あつて再び相見ゆる事が出来ようぞ、知がず、我輩之れより單身再舉を企てて、見事我銃の彈丸の錆と爲さで止む可きか、然り男兒の面目、本懐共に此に在りと、直ちに銃に磨きをくれて彈丸の用意を爲す。

二月十二日、五尺有餘の雪を蹴立てて單身孤銃を提げ、雪の山中に再び猛虎を探ぐらんと、武装を嚴重にして出發せんとする時、我輩の愛犬（ブルトック）ジョンの元山に上陸勿

々、病氣の爲め入院してありしが、健康舊に復して送り届けらる。

身の丈三尺に餘る、理想的の大獵犬、父が數千金を投じて買ひ求め、我輩猛虎狩りの、錢別とせられたる者なり。

「オ、ジョンよ、汝來れるか、汝の來援は我れに取つて千百の味方を得たるが如き心地ぞする、ヨシ汝の來援を幸ひサア今から發足だツ!!」

と愛犬を引き連れ、又も三川山麓にと、雪の山路を急ぐ、久

しく入院して、銃を見ざりし獵犬の、我が獵装と銃を見て勇み喜び、逸りに逸り、さなきだに犍猛無比の稱あるブル種族の、獸と見れば悉く追ひ捲くりて、其牙に懸けて倒さんと暴れ廻る、時に豚を屠り飼馬を傷け、漸く十三日午前九時、再び三川山麓に出づ。

『此邊だつたなア、先達虎を撃ち洩らした所は……』
と見廻はす中、ジョンの慧敏なる鼻は、何物かを嗅き付けたらしく、頻りに雪を掻き分けつゝクンクン鳴らして居る。

儲ては猛虎の臭ひを嗅き付けしよなと、見て居る中、ワンと一聲高く吠わしたジョンは雪の上を直一文字に走り出す。

▲人犬共に雪を泳ぐ

五尺餘りも降り積める雪の、尋常一様の事にては、到底歩き得可くもあらず、我輩も犬も共に四つ這ひに這ひ歩く様は白水新發明の雪泳術とでも稱す可き歟。雪を這ふ事、否泳ぐ事約三里半、再び方池里の部落に出づ鮮人共等眼を丸くして、

『旦那様、何處へ御出になります』

『ウムまた虎獲りに來たのだ』

『まア此大雪に……日本人は偉い』

妙な所で感心して褒めて居る。

『僕のやうな男は、日本には幾万人居るが知れんのだ、皆も其積りで日本の爲めに働かねばならぬ、モ一日本人とは兄弟になつて居るのだから……』

片言交りに聞き覺わの朝鮮語で言ひ聞かすと、彼等鮮人共

大に満足したと見わた、好遇實に至らざるなしである、面倒臭ひ問答を切り上げて温突にゴロリ、先夜は多勢の上に疲勞し切つて居つたから、夫れ程にも思はなかつたが、今夜は獨り寢の部屋と言ふ部屋に居る南京虫と虱の一族共に攻められて、愛犬ジョンすら、満足に眠り得ぬ容子である。

翌早朝飛び起きるや否や、何處を目的とも定めず、唯犬の行く儘に路を西北に取つて山奥殆んど四里ばかり、あらゆる困苦を忍ばて進み行けば、全く人里離れし雪の山奥に日は暮

れた、而も時は北朝鮮の酷寒の候、寒氣峻烈肌も裂け、耳も落ち骨をも削らんが如き心地、剩へ積雪五尺餘の上にゴロ寢の夢を結ばざる可らず、糞ッ我れ程の男一疋、此寒さに、此雪に負けて、今夜一夜眠らずに夜を明かしたと言はれんには後日の人の笑ひの種子、凍れて死なば夫れ迄也、ドリヤ寢てやれ。

防寒外套に身を包みゴロリと雪の上に大の字形南京虫に攻めらるるよりも此方が増だ哩と片意地、またも突き張る獨り

言、何時の間に眠つだか、白水とても木石にあらぬ身の、朝寒の午前三時頃フト目が覺めた、全身恰も鐵の如く冷んで、生きた人の心地だにしない、鼓勇一番、雪を蹴つて起き上り犬を頼りにまたも雪の深山を分けて狩り立てる。

時に百雷の一時に落ちたるが如き響を聞けば、斷崖千丈の大雪崩、時に旋風雪を捲いて吹雪と化し、我を圍んで來るあり千山萬岳唯白皚々たる雪の波狀を爲して、脚下に起伏する態實に一種凄愴の氣を帯びて、快絶とも壯絶とも名狀すべき

言葉だになし。

一步は一步より峻はしき山路、一步は一步より雪深き所、約五里ばかりにして日は暮れ果てた。

昨日今日、飲まず喰はずに二日間、飢寒と戦ひ、惡戰苦闘あらゆる艱難を嘗め盡して、漸々此所まで辿り着きしも、今宵また此雪の上に、ゴロ寝せざる可からざるかを思へば、魂盡き氣萎へて、今は一步も進み得べくもあらず、或巖角に腰を下ろせば、飢寒、疲勞交々至る。

されど這は我輩のみにあらず、愛犬ジョン君も亦同じ運命の許に在り、唯彼れ心なくして我れに此苦痛を訴へず、我れ萬物に靈長として、豈彼らに笑はれんや、緊禪一番戎衣悉く雪に凍りて、鐵の如く激烈なる寒風、肌を徹して骨を削らんとする酷寒を雪の深山に夜を明かす。

今朝は疲勞、困憊、饑餓、一時に攻め來り、僅に銃を杖きて或は下り、或ば上り、漸く三里にして戸數三四の寒村に出づ、方池里を出て三日間始めて、人里に至り食を求めて漸く

蘇生の思ひあり。

▲遂に猛虎を斃す

單身孤銃を提げて、再舉を企て雪の深山に惱みに惱みて、疲勞、困憊、饑餓と、重ね重ねて漸く、永興川上流七里半の寒村に出で、

『今夜始めて人家に寝らるる哩』

粟飯の大碗を平げて夜を明かす、元氣頓は恢復して、勇氣平生に倍加す、今は昨の我れに非ず、今日こそは如何なる嶮山

難關も踏破して、猛虎を撃ち取らずんばある可からず、特に
 愛犬にも鷄卵三個を與へて勞を犒ひ、元氣を付け勇躍して、
 熊閨山の難嶮に向ふ、海拔四千五百尺、山高からずと雖も、
 磊々たる巖石に裸石の蝸附して、累々兀突したる到底犬だも
 登り得可くも思はれず、漸くにして、山の七合目頃に達す、
 此時愛犬の勇み勇んで、ワンと一聲「敵近きに在り」の信號
 を爲す、由來獵犬は其尾を以て獲物の有無を信號す、獲物近
 きにあれば其尾を振る事頗る急なるものなり。

『ウム猛虎、此山に潜み居るか、恨み重なる汝と雌雄を決
 する今數刻の後に迫れり、汝我れに乗せんか、短軀なりと雖
 体量十八貫餘、汝の飢腹を醫するに足らん、我汝に乗せんか
 銃彈丸共に新式の業物、況んや腕は多年鍛へに鍛へし練磨の
 腕、ヤワカ撃ち洩らす事のある可き唯天運に任かして勝敗を
 決せんのみと、血湧き肉躍りて、骨に唸りを生ずるを覺ゆ先
 づ徐ろに愛犬に聲援を與へつ、午後一時過ぎ山の八合目に達
 す、果然、行く手に當つて大巖石の我れを遮ざる、傍を見れ

ば猛虎の足跡、は八九歩雪に印す。

『ウム此巖を廻つて、山を向ふ側に越し居つたナ、ヨシ續

いて追撃たツ』

大巖石の下手を見下せば、刪りたるが如き千仞の谷若し、一歩踏み誤らば、忽ちにして此谷底に消ねん、ドコか登る所もなきかと思廻せば、附近一体は轟として刪り立つたる如き巖石鋸齒状を爲して、屏風の如し、ヨシツと用意の麻繩取り出して、投げ掛けく、漸く其巖上に達したる時足許の大巖下

に猛然吠ゆる愛犬の聲、續いて轟然風を捲いて飛び出したる大猛虎。

『呀ッ猛虎ツ!!』

と言ひも果てず、約一丈三四尺餘の巖上より身を躍らして、『虎ッ』大喝一聲、飛び下りさまズトンと一發、切つて放した弾丸は、狙ひ違はず左の肩先きに撃ち込んだ。

『ウオーアー』

天地も崩れよの大悲鳴、一聲残すや否や、流石の猛虎も虚空

を握んで打ち斃れた。

五二

『占めたッ』

五尺有餘の積雪を蹴立てて狩り立つる事。實に十有八日にして二月十七日、始めて目的を達す、頭の先きより尾の先きまで九尺七寸餘の大猛虎が、一發の銃聲と共に脆くも打ち斃れ鮮血積雪を染めて、其壯觀何に譬へんやうもなし、折柄麓に當つて聞ゆる一發の銃聲。

『ハテナ、今鮮人共等には、銃器の所持を禁じてある筈だ

が、ヨモヤ日本人が此山奥まで來る可き筈もなし、或は鮮人等の密獵かなッ』

と思ふ時『オーイ』と何物かの呼び聲に、『オウ』と答ふれば、またもや『オーイ』と呼ぶ、應と答へ『オーイ』と呼はりつゝ近づき來るを見れば、江島竹原の兩氏なり。

『ヤア君等ドウして來た？』

『イヤた目出度う!! 到々やりましたなア』

『今やツつけた所です、夫れより君等はドウして來たので

五三

すか』

江『實は君が唯一人で出掛けられたと聞いて、心許なく君の足跡を尋ねて來ました、所が銃砲の音でせう、此山奥だから多分君だらうと一發合圖に放して置いて、オーイオーイ呼んで見たのです』

竹『所が矢張り君だつたので……』

『ソリヤ御親切有難う、ぢや君一ツ手を貸してくれ給へ、皮丈け剃いて持つて歸りませう』

『ヨシ來たツ』

と三人力を合はして、名自山刀を抜き放ち、漸く皮を剥ぎ取り、生血の滴る皮を提げて一同、永興邑に凱旋す聞き傳へたる鮮人共の、蒼蠅く付き纏ふも今日ばかりは嬉しかつた。

▲虎穴に臥し虎の歸りを俟つ

猛虎一頭を斃したる餘勢を驅つて、再び永興川の上流九里半の、命山鷹山の大嶮山に猛襲を企つ、江島氏は會社の都合に依りて行かれず、精悍無比の竹原氏と唯二人、行を共にす

永興川の結氷を踏んで遡る事九里餘にして盤龍面龍上里に着
 く、早速鮮人宿屋『歩行客主』と麗々しく表札したるに宿を
 求めて一泊、翌朝主人を呼んで、

『オイ之れから命山と鷹山に登らうと思ふのだが、誰れか
 道案内者を一人呼んでくれ』

『旦那様、あの山へは案内する者がありませんよ、命山は
 登るもの必ず一命を失ふと言ひ傳へてありますので命山
 と命名し、一方の鷹山は鷹のやうな、翼の強い鳥でなけ

りや頂きまでは、登れんと言ふ事から命名した山で部落
 の者は此二個の靈山を非常に恐れて居りますから、誰れ
 も行き手がありません』

と氣の毒さうに言ひ譯する、

『ヨシぢや竹原君、君鷹山の方に登つてくれ給へ、僕は命
 山に登るから、そうして無事に絶頂に達したのから、

火の手を擧げる事にしよう』

『宜からう、早速出發だッ』

直ちに結束して、別れくゞに道を取り、命山の天峻を約八合目頃まで踏破したる時、鷹山を顧みれば、既に絶頂に火の手を見る、竹原氏の健脚に驚きながら自分も漸く命山の絶頂に火の手を擧げ、双方無事に登山の合圖をして、先づ愛犬を放つて狩り立つるに何事ぞ虎熊常に群を爲すと聞きたる此山に狐一足の足跡だに發見せず、持前の肝癩玉は破烈した。

『駄目だ下山だ、糞ッ』

と犬を呼びて下山し、例の宿屋に待つ事、約二時間にし

て、竹原氏も歸り来る。

『駄目だ君!!何にも居らんよ』

『イヤ待て君、僕は今聞いて來たのだが、此川下一里ばかりの所に虎の穴があるさうだ、ドウだ君明日其穴を襲ふて見ては……』

『大賛成!!やらう』

虎の穴ありと言ふ耳寄りの話に、破烈した肝癩玉も落着いたヨシ明日は一つ早朝にやっつけてやらうと、竹原氏と作戦の

計画を定めて、寢に着く、冬の夜長の待ち遠しく午前四時、枕を蹴つて起き上り、宿の者共を驚かして、朝餉を急ぎ、早速武装を整へて發足す、教へられた通り川を一里計り下りて、山を一つ越ゆれば、果せる哉、大なる虎の穴、而も野獸類の死屍累累として棄てられ、血腥くして四面凄愴の氣満々たり、猛虎此中に在り、如何にして襲はんか、二人は大に當惑しながらも、昨夜定めた作戦の計画に依り、數回犬をして挑戦せしめたるも、何等の効なし、ヨシ一ツ這つてやれと、またも

片意地張りの瘦我慢。

『竹原君モ一駄目だ、這ろう!!』

『ナニ這る?』

『勿論よ君、虎穴に入らずんば虎子を得ずぢやないか、』

『ウムヨシ這ろう!!』

竹原氏も負けず氣の突張つた意地張り屋、二人は無言に、穴の中に飛び込んだ。

『南無三ツ、穴は藻抜けの殻!!』

張りつめし勇氣も失せて茫然!!、銃を杖つきて。

「居らんぞ君!!」

「ドコへ往ツたらう?.....君晝間は遊びに往ツて居るんぢやないか」

「ウムさうかも知れん、ヨシ晩に夜襲だツ」

と二人は元來だ道に取つて返へす、五六丁にして途に鮮人に遭ふ。

「旦那様ドコへ入らツしやる」

「ウム虎の穴に往ツて來たが居らなんだ」

「へい.....虎の穴、二ツ共御覽になりましたか?」

「ナニ穴が二ツある?、ヨシ貴様案内しろツ」

厭がる鮮人を無理に案内さして、來り見れば前にも増したる大穴、物凄き絶壁の下にある。

「ヨシ解ツた、モ一貴様は歸れ」

と鮮人を放ち歸して、再び竹原氏と探見電燈を點しながら這りて見れば此穴にも居らず、二人は直ちに宿に引き返へして

『子竹原君、彼の穴には居らんのだらう子』

『イヤさうでもあるまいよ、晝間は外に出で夜分には屹度歸つて来るんだテ、ドウだ君今夜から一ツ彼の穴に泊まつて見ようか』

『ウム妙計々々一ツやツつけよう』

『ぢやさうと極めて今から晝寝しよう』

二人は點燈頃まで晝寝して、用意を整へ、自分は上の穴に、竹原君は下の穴にと這り込んだ、元より敵の留守に、其本陣

を奪ひ、歸り来るを俟つて、撃ち取らんの計略なれば、些の油断もある可き筈なし、穴の外の物音には氣も心も配りて、全夜一睡もせず明かした、されど歸り来る可き容子だにない次ぎの日も次ぎの日も、同じ事を繰り返へす事五晩、今は全く絶望!!

而も竹原氏は、其日限り會社の都合にて、獨り永興に引き返へし我輩は別路咸興に向ふ、時既に三月二日也。

▲摩天嶺上の白虎を探る

五日五晩、虎の穴に起臥して、猛虎來れ!!

と待ち構へし事も徒勞に期した、腹立ち紛れに竹原氏一人は永興に引き返へし、我輩また咸興に道を取る、兩人の失意想ふ可し。

肝癢紛れの道も意外に抄取りて、咸興に着けば、同窓の友豊福豊氏の農工銀行に在るありて、懇切なる歡待を受け、遂に全氏の厚意に甘へて悠々と滞在す、要するに我輩の呑氣と我儘とは到る所に發揮して、先方の迷惑なぞ眼中になし、今

日も骨休め、明日も静養と約旬日、漸く暇を告げて出發せんとする時、元江原道の暴徒の首魁、洪範道、部下二千、砲六門を率ひて、何時朝鮮内地に攻め入るやも知れずとの警報頻々として來る、爲めにか咸興憲兵分隊長立川大尉は、我輩の如何に辞むも聞かずして、憲兵上等兵某君を伴はしむ、某君と共に咸興を發して、關々嶺の大峠を越ゆるや、鹿狩りを始む。

某君は分隊の名譽射手也、我輩また山獵師を本業とし、銃

を取つては、曾て人後に落たる事なし、兩天狗茲に競射を行はんとす、的にせらる、鹿こそ氣の毒也、犬を放つて狩り立つるに、忽ちにして鹿二頭を見る、某君先づ一發放つて損じ我輩自重して放たず、犬に追はして矢頃を見計ひ、時分はヨシツと約三百米突計り、狙ひ定めて切つて放てば、見事に命中す、得意實に想ふ可し、通り懸りの鮮人に獲物を脊負はして、洪原警察署長小林氏方に至り、夕餐の膳を賑はし、片臙は切いて立川大尉に贈物とし、翌一日は滞在して憲兵某君と

共に、鶴山面方面に猛虎を探る、此附近一体の地は丘陵多くして、到底虎の棲む可くも思はれず、僅かに鶴一羽と雁九羽とを撃ち取りて歸る、洪原附近は三月の上旬より、無数の雁群を爲して、水田に来る者裕に萬以上を以て數ふ、好獵家の腕試めしに出獵もまた一興ならん歟、敢て薦む。

翌日、憲兵君と別れ、沿道猛虎の出沒を聞き糺しつゝ、順路北青、利原、端川と泊りを重ね、摩雲嶺の嶮を越えて、摩天嶺の麓、館南里憲兵分遣所に着く、此日も正午頃より雪降

り出して積む事四五寸。

「オ、寒い、今晚御厄介を願ひます』
と名刺を差し出せば、

「イヤア、サア早く上り給へ」

「雪で御難儀でしたらう」

と口々に所員諸君等の親切一、雪に濡れし外套を脱ぎ、漸くに座に着けば、

「貴君が猛獸狩りに來られた事も、既に虎を獲られたと言

ふ事も、新聞で見て居りましたが、其後の獲物はごうで
すか」

「イヤ實に恐縮ですなア、其後は格別な獲物もありません
が、此邊はごうですか、何か好い獲物の居りさうな所もあ
りませんか」

「さうさう、昔から此摩天嶺には白い虎が居ると言ひ傳へ
られてありますが……………」

「ソリヤ直實でせうか」

「イヤ別に僕等が、見たと言ふ譯でもありませんが、鮮人
共には見たと言ふものもありますよ」

「さうですか、ヨシぢや明日一つ探ツて見ませう」

好矣明日は其摩天嶺を探り、彼れ如何に神通力ありとも、木の根、草の根、搔き分けて探り出し、ヤハカ我彈丸にかけて撃ち取らずんはある可らずと、銃に磨きをくれて、一泊す。翌くれば、夜來の雪は晴れたれど、風いと寒し、窓を排せば、海拔六千餘尺、悠々たる摩天嶺の大天峻雲に聳ね、全山

雪に埋まりて白皚々たり、此山に棲息したらん程の獸にして此雪に足跡を印せざる者なかる可し、而も之れ程の山に何か猛獸類の棲息するも必定なり、今日我眼に止まる程の物あらば何物なりとも片端より撃ち取りくれん、ヨシツとばかり分遣所員一同に暇を告ぐ。

「愈々おやりになりますか」

「やつて見る決心です、ごうも山の模様から見ると、何にか居りさうですから」

『さうです、之れ丈けの山ですから、屹度何か居りますよ』

『幸ひ、雪が軟い中ですから、足跡がありませう……………』

ぢや失敬します』

『夫れでは……………是非やつて來給へ』

『左様なら』

と麓まで見送られて、犬を放つて愈々摩天嶺の大探索に懸る狩り立つる事約六時間餘、午後二時始めて絶頂に達す、雪を頂ける千山、波状を爲して起伏する様、實に壯觀、名狀すべ

くもあらず、北朝鮮の萬岳悉く一眸の中に指呼し、無名の高山一々撫するに足る、噫、山なる哉、高山なる哉。

かくて狩り立つる事、三日及ふも白虎は愚か、何等の獲物だになし、四日目朝より左足の拇指に、疼痛を覺て正午頃には堪へ難し、或ひは凍傷ならずやとの疑も起りしより、道を城津に取りて、醫師の診断を乞ふ、果せる哉、凍傷ごの事なり、曾て上陸地より或目的地点まで達する間は、汽車汽船の便を籍りすと決心せし我輩も、遂に止むを得ず、海上便船

にて城津より清津に出て醫療を求む。

七六

▲愛犬非命の最後

摩天嶺上の雪中に白虎を探りて、凍傷に罹り約二週日餘り
醫療に親しみて、漸く全快した、此日羅南の人、馬場進美君
尋ね來り相携へて、咸境北道廳に、白山憲兵隊長を訪ふ事を
約し、午前九時、百餘日の間生死を共にせる愛犬ジョンを携
へて、咸境北道唯一の輕便鐵道に塔乗して、羅南に向ふ。
輕便鐵道とは眞に名のみにして、彼の土砂を運搬する、ト

口の臺のみなるに身を乗せれば、後より鮮人共の棒にて押す
ものにして、危険此上もなきものなり。

清津を出て、約二里ばかり走りしかと思ふ頃、愛犬ジョン
はワンと一聲、高く吠ゆるやアナヤと思ふ間に七八間、線路
の唯眞中に飛び降りたり、元々人の力に依つて運轉するもの
多少の隋力は有りとするも、止めんとして止め得ざる可き理
由なし、然るに無情なる鮮人共は、後より強く押したれば遂
にジョンは車の下に輓かれて、悶々苦しむ有様、見るに見兼

七七

ねたる我輩、一層一思ひに撃ち殺し、一刻も早く此苦痛より免かれしめんと、手錬の銃を取り上ぐれば、氣息俺々たりし愛犬のヤオラ身を起して、我輩の懷に抱きつき、其痛苦を訴ふるに似たり、馬場氏は、其いじらしき動作を見て、

『君羅南に往けば獸醫も居るから、其儘にして車に乗せて往かう、助かる者なら助けてやるのが親切だよ』

『然し君、逆も駄目だよ、長く苦しめるのも可憐さうだ、一層一ト思ひにやつた方が、好いかも知れんが、僕も百

日餘りは、此犬一つを力にして居つたのだから、ぢや兎も角も羅南まで連れて往かう』

其儘我輩の膝を枕にさして、再び車上の人となつたが、憐れ愛犬ジョンは途中に於て遂に絶息した、馬場君の勧めもあり旁々獸醫某君の診察を求めたが到底駄目であつた。

其日葬る筈であつたが、用事の都合上鏡城に赴き、翌くる日午後三時戻り來り、今日は憲兵隊に出願して、將來羅南の公園地とも囑目されつつある、琴平山の頂上に葬りやらんと

犬の死骸に蔽ひ被せありし毛布を取れば、冷やけき一個の犬の死骸より滾々として、流れ出でたる鼻血!!

噫!! 汝一疋冷たき死骸として、此地に残し行かん事我本意にあらず、今日まで幾多の危地を汝に依つて救はれしかを思へば、汝の功績、實に我が生命の親なり、汝の靈以て瞑す可く、汝また死して護國の鬼と化せよ、

と言ひ聞かす、熱涙滂沱として頬邊に傳ふ、

早速手續を済まして琴平山上に葬り、墓標を立てて、「愛犬

『**ジョン之墓**』、明治四十四年四月九日、報知新聞記者三石白水建之と誌して、永久に犬の靈を祀り、再び清津に引き返へし、愛犬の復讐戦を企画せしが、仲裁者ありて示談し、豆満江の河口雄基に向つて發足す。

▲ 獵犬を贈らる

愛犬に死別れて、寂莫を感じつつ、獨り行く道も抄々しからず、中二晩泊りを重ねて、豆満江の河口雄基に着く、露、清、韓、三ヶ國の國境横断てふ大膽なる計画の遂行を思ひ立

ちたれば也。

八二

曩さきに我輩わがはいの愛犬あいけん横死わうし事件じけんは、清津せいしん發行はつこうの北韓ほくかん新聞しんぱんに依つて、廣ひろく報導ほうどうせられ、我輩わがはいを知る人、知らぬ人、同新聞購讀どうしんぶんこうどく者の知る所となれり、雄基ゆうきの俠商きやうしやうとして名ある宮崎豪次郎みやざきごうじろう氏訪ねらる、

『時ときに先達せんだつてはお氣いきの毒どくな事ことでした、犬いぬが輓ひき殺ころされたさうですなア』

『殘念ざんねんな事ことをしました、よく私わたしにも山やまにも馴なれて居ゐつた奴やつ

で、夫おとこれに掛換かへがも御座ございませんものですから』

『ソリヤお困こまりでせう、雄基こごに滿洲まんしゅう犬けんの大きな奴やつが二ツ居ゐりますから、夫おとこれを御周施ごしうせん申まませう、夫おとこれから私わたしが元もとスツテセルの愛犬あいけんであつた、テフと言いふ奴やつを一疋ひきも持つて居ゐりますから差さし上げます、是非ぜひぞうぞお連つれ下さい、犬いぬの名譽めいよですから、ナンなんの役やくにも立ちますまいが……』

『夫おとこれはごうも何なによりの贈物おくりもの、有難ありがたく頂戴てうだい致します』

と純露西亞じゆんろしや産さんの逞たくましきを贈おくらる、更さらに二疋ふたひきの滿洲まんしゅう犬けんをも買か

八三

ひ求む。

由來滿洲犬は、狼との雜種多く性頗る獍猛なるものなれども、鹿、猪以外には猛獸獵に何等役に立たず、（後の經驗に徴して也）。

愈々三疋の猛犬を引き連れて、慶興に向はんと宿の主人を呼び、

「明早朝に慶興に行きたいが、誰か荷物を背負ふて行く鮮人を一人呼んでくれんか」

「旦那様、此邊の鮮人共は仕事に出ませんよ」

「ソリヤまたどう言ふ譯で」

「妙な習慣がありました、松の木の甘皮を剝いで来て喰つて居つても、遊んで居る方が好いと言ふ連中はかりですから、始末に往けませんよ」

「困た奴等だなア、ヨシ夫れぢや僕が背負つて行かう、白木綿を一丈五六尺買ふて置いてくれ」

「へい承知しました」

好矣我程の男、鮮人一人を頼み切れず、荷物一つを手に餘したと笑はれんも癩の種子、何程の事かあらう、背負つて往く哩ど其夜は悠々と休み、翌朝、十五貫餘の荷物を背にしたれど手には一貫二百目餘の鐵砲を持ち、腰には彈丸二百發重量七貫目餘を結び付け、其上に刀まで差し込み、總重量、荷物丈にて二十三貫餘、我輩の体量十八貫餘を合して、合計約四十二貫也、横綱梅ヶ谷君の道行きに異ならず。かくて雄基を出でて四里、愈々雄基嶺の大峠に差し懸りて

麓に少憩を取る。

▲雄基嶺上狼の晝寝

口でこそ二十三貫なれ、之れを斤數に直す時は、約百四十斤餘、体量共四十二貫、實に二百六十斤餘の重量を運ぶ、双脚は痛みを感じ、双肩また然り、而も道は峠の急坂路、到底兩脚のみにては此時すら登り得可くもあらず、手頃の杖をも頼みて、三本足となり漸く絶頂に着く、思はず、

『ドツコイシヨツ』

と大聲、巖上に腰を下ろせば、絶壁の上に名も知らぬ一疋の
 怪獸、悠々たる晝寢の夢破ぶれて、不平さうな面構へ、見上
 ぐる眼と見下ろす眼と期せずして、視線の衝突!!

好矣、其所動くなアツと、銃を引き寄する間に、蓄生ツ無禮
 至極にも放尿一射、今は堪忍袋の緒も切れた、狙ひ定めて撃
 つたる弾丸は、彼の下顎より頭上に撃ち抜きたれば、何かは
 以て堪る可き、絶壁の上より真逆サマ!

『ザマ見やがれ、武士に向つて小便なぞひりかけるから、

之れこそホントの不禮撃だツアハ………』

と笑ひながら荷物を下ろして、肩を見れば肩肉腫れ上りて、
 所々血にじむ、追がの我輩瘦我慢の角も折れ果て、今は如何
 はせんと思ふ折しも、麓より上り来る二人の支那人。

『ヨシ奴等に背負はしてやれ』

と獨言、遂眼前に来れるを呼び止め、

『オイ君等、此荷物二つ慶興まで頼むが、持つて行つてく
 れ』

『ヨシ一圓だ』

道がは支那人也、持つて行くとも行かぬとも、返事もせぬ先きに、既に運賃を定むるなぞ、滑もまた稽ならずや。

『宜ろしい頼む』

と二人に荷物を確つと背負せ、往く往く財布の底を調べれば、所持金僅かに七十銭なり。

了つた、ウツカリ背負はしたが先きに着いて七十銭は、少し氣の毒な感じもするが致し方なし、ヨシ愚圖々々吐せば、

後は拳だ、ウムさうだと度胸を極めて慶興憲兵分隊に着く、分隊長鶴村大尉、之を見て、

『ヤア大きな狼だア』

『分隊長、之れが狼ですか』

『ウム、狼だ』

『蓄生、巖の上から小便を放りかけました』

『ソリヤよかつた、其小便が眼に這つたら、眼が潰れると言ふせ、ドウだ君、賣らんか』

『お入用なら、可成高く買つて下さい』

「之れで賣り給へ、財布にある丈けだ」

と七圓握み出した儘狼を下げて往く、文那人等には約束通り一圓を與へ其夜は慶興に一泊。

▲飯の曲喰ひ

僅かに六圓七十錢、懷にして其夜は慶興に一泊、翌くる日は新阿山に向ふ、途に五竜川橋落ちて馬不前、此日春雪霏々たり。

春風料峭渡無船

春雪霏々馬不前

一條村橋岸横所

星落暗流五竜川

と薩摩守忠度を氣取り、一詩を賦して、乳下に及ぶ流を徒涉し、新阿山に一泊す、次ぎの日は慶源に向ふ、途にまた怪しき鮮人に遭ふ、彼よく、日本語を解し、

『貴ト、ドコへ行くあります？』

『我輩か、慶源に行く！』

『慶源？、慶源のドコへ行くありますか』

『守備隊か憲兵隊かにだ』

『ナニ用あります』

『ナンダ生意氣な、貴様ソナ事聞いてどうするグヅク
言ふと拳だぞ』

ハヤ腸の虫が承知せぬ、肝臓玉が破裂しかけた、握りシメた
る錢拳は、アハヤ彼の頭上に飛ばんとする刹那、

『イヤ失禮しました、私は慶源憲兵分隊の上等兵です』
と差し出す名刺を見れば、正に夫れ也

『近來少し物騒な事がある者ですから、今日は密偵に出た
所です』

『ハハアさうですか、鮮人にしちや餘り失敬な事を言ふ奴
だから、今鐵拳でも加へてやらうかと思つて居つた所で
したハア……』

と笑ひながら名刺の交換を済まして、右と左に別れて道を急
ぐ、漸く其日暮れ方に慶源憲兵分隊に着きて一泊し翌くる日
は訓戒鎮に向ふ、此日また雪空に加ふるに豆満江の川風、寒

く身に泌みて、春とは云へ堪へ難き殘寒、午後よりは愈々降り出しぬ。

雪の國境を、流れに沿ふて遡り、午後三時訓戎鎮憲兵分隊に着く、日猶高けれど、分隊長の懇切なるに甘へて一泊す、其夜守備隊長等も來り快談午後十一時を過ぎて、寢に着く。今日は愈々穩城に向ふ、懷中僅に四十二錢を殘すのみ、前途猶遼遠なるに、性來の吞氣坊も聊か心細さを感じたり、されどまた忽ちにして其本性に立ち戻り『どうせ成るやうにし

か成るものか』と獨言しつつ、漸く穩城に着く。

由來、朝鮮の各憲兵分隊、分遣所等は行人の便を圖りて、旅人宿を兼業す、高等官一泊料一圓、判任官一泊料六十錢、一般行人は其實費を申し受くと云ふ事になつて居る、我輩などは其高等官待遇として、常に一圓宛の宿料を仕拂ひ來りしもの、今此所で、憲兵隊を訪ふて、實費仕拂ひなぞと、迷惑をかけては申譯なし、鮮人宿屋に泊まらんか、恐る可き南京虫の襲撃思ひやらる、ヨシツ何處かに日本人の宿屋もあらん

と、漸やうやくにして探さがし當あてて、直たちに妻おかみさん君ごうしやうと交は渉じを始はむ、

『時ときに、君はく、僕はくは今いま懷ふろに四十二錢よんじふにせんしかないが、ごふだ之これれで今こん晩ばん一いちト晚ばん泊どめて、貰もらへまいか』

『へい四十二錢よんじふにせんばかりでは、お氣きの毒どくですがお斷ことわり申ましま
す』

『オイ、そんな不ふ都合ごうな事を言いふな、尤なも僕はくは今こん夜や丈だけ、飯めしを喰くはして貰もらへば、明あ日の朝あさは喰くはんでも好よい、
寝ねる所ところなんかドンナ所ところでも好よいよ、蒲團ふとん其他さい一切さいは持もつ

て居ゐる、唯ただ飯めしさへ喰くはして貰もらへば好よいのだが、ごうだ』

『へいさう言いふ事ことでしたら、マアお泊とまりなさい、ナニもお
構かまひも致いたしませんか』

『ソリヤ有あり難がたう』

鞋わらじを取とつて座敷ざしきに通とほる、暫しばくして女中ぢやうぢやうの配膳はいぜんに、太かく違たまし
き彼女かのじよの腕うでに依よつて給仕きうじせらる。

『オイ女中ぢやうぢやう君くん、君きみの所ところの妻さい君くんはケチな女おんなだなア、僕はくに明あ日す
の朝あさ、飯めしを喰くはせんで此こ所ところを出し發はつさするさうだから、僕はく

は今晚に明日一日分喰ふて置かうと思ふんたが、ごうだ』

『へい、何程でもお上り、私の腕の續く限りはお給仕をいたしませんから』

『此奴、生意氣なヨシ、夫れぢや遠慮なしに飯の曲喰ひだ』
と食ふた食ふた大碗約十七八杯、大に満腸、驚く女中を尻目にかけて、

『イヤ御馳走サマ、ドリヤ寝やうか』

ゴロり横になる、翌朝目覺ませば午後五時、今日は會寧まで廿一里、飯まず食はず一日にやつて行かねば、懷中既に無一物なり、昨夜喰ひ溜めの腹も、空腹と言ふ程にもあらねど、ドウヤラ空さかけたり、人間は到底喰ひ溜めの出来ぬ動物也

▲怪僧に出逢ふ

痛む肩に荷物を眷負ひ、宿を飛び出して正に六里半、草坪に着く、睡眠を催し隋氣満々襲ひ來る。

『ごりや、少し晝寢してやらう』

と荷物にものつを路傍ろぼうに投げ捨て、前後不覺ふかくに寢入る、枕元まくらもとで、

『オイ君、起きんか、オイ君』

と起す奴やつがある、其聲こゑのフト耳みみに入るや、目は覺めた、然し我輩わがら眼めは開けぬ、已たのれ人の晝寢ひるねの邪魔じやまをして不都合ふつごうな、今に見よ我輩わがらの身邊しんべんに指一本ゆびほんだに觸れたらんには、唯置たおくものか見て居れ、ごうするかとまたもや狸寢たねい入り、突然いきなり、彼のかれのさうしゅは我輩わがらのさうけんに掛り、頻りにオイ〜揺り起す、かくまでせられては、最早もはや狸寢たねい入りも續つくる能はず、轄然眠かつぜんめを開けば、

枕元まくらもとには雲突くもつくばかりの大入道たうにうぢう、ウム此糞坊主このくそぼうずか、人の晝寢ひるねの邪魔じやましやがつてと、ムク〜起き上る。

『オイ君、ドコから来てドコへ行く』

此奴こやつ愈々不都合ふつごうな坊主ぼうずなり、人の晝寢ひるねの邪魔じやまするだにあるに何事なにごとぞ其横柄をうへいな物の聞きやうは、此奴こやつ一番驚はんねかしてやれ。

『僕ぼくですか、僕ぼくなら北きたの方ほうから来て、南みなみの方ほうへ行きます』

アハ………と高笑たかわらひ。

「イヤ面白たもしろい北きたから来て南みなみへ行く、成程なるほど、ごうだ君、馬で

行くのか』

『イヤ馬なぞよりも飛行機なぞよりも、モット完全な、祖先傳來、親譲りの此足で歩いて行く』

『ナカ／＼元氣だ、面白い、僕の家に泊りに來給へ』

『君此邊に家があるのか』

『ウム向ふに見へて居るのが僕の家だ』

『ヨシ飯さへ喰はしてくれりや行かう』

『アハ………大分腹が空いて居ると見ゆるな』

ヨシヨシ喰はしてやる、來給へ』

怪しき坊主と打ち連れ立つて彼の家に行く、鮮人家屋の温突の一室四疊半ばかりに、這り込み、

『此所が君、僕の家だ僕の本陣だ、今から一寸君の御馳走を用意して來るから、晝寢でもして居給へ』

と押入の中から大きな袋を取り出す、由來此袋は、滿韓地方旅行者必須の用具にして、南京虫除けの厭禁、則ち此袋に全身を入れて寝る者なり、イヤ此坊主好い物を携帯して居る哩

ドリヤー一ツ晝寢してやれつと、袋の中に這り込めば、地悪意
くも坊主め、袋の口を固く結んで出て行く。

南無三、シマツた何の氣も附かずに袋に這つたものの、斯
く固く口を結んだとは、迂散な奴、と袋を透かして見るに、
現在我輩の袋に這る時まで其枕元に在りし、刀の影も形も見
えず、サテは汝泥棒なりしよな、我輩を此袋に入れて手も足
も自由にさせず、今に彼の刀を抜いて切つて懸らん積りなる
可し、ヨシ其儀なれば此方にも考へあり、後で泣き顔するな

ツと、ナイフを取り出して袋を破り、後ろの壁側に立て掛け
ありし、鉄砲取るより再び袋の中に這り込み、今に見よ汝の
切らんとして近付かば、一發ズトンとやてやるからと、狸寢
入りを始むる約四十分、漸くにして坊主め歸り来る、入口で
アハと高笑ひ、

『イヤ臆病な奴だ、枕元の刀を片付けたら袋の中に鉄砲を
入れたなア』

ズポリ圖星を指れた我輩、モハヤ狸寢入りもならず、突然袋

から飛び出して、

『ヤイ糞坊主ッ』

と大喝一聲すれば、

『オイ〜糞坊主も何にもあるもんか、マァー飯でも喰ひ給へ』

俟て〜今飯も喰はずに、此坊主獨り位相手にして喧嘩した所で、満々〜にも負くる可き我輩に非らず、然りと雖も喧嘩した後に若し飯を喰はせられざらん、何時飯を食ふ可き

的もなし、好俟、飯を喰つて後緩くりと喧嘩するとも遅くもなし、ドリヤ御馳走食つた後で、喧嘩するならしてやれと、忽にして大碗五六杯を平ぐ、此間に坊主のする事、爲す事悉く奇抜にして、我輩を喜ばす事限り無し、茲に意氣自ら相投じ、悠悠四五日間坊主の許に宿る。

▲坊主の大妙計

如何に意氣の投合したればとて、如何に我れ吞氣にして我儘なればとて、何時何時迄も坊主の許に厄介になん事、何と

なく心苦し、イザ今朝は出發せんものと、

「愈々今朝は出發だツ」

「ヨシ僕も出掛よう」

「君もか……」

「ウム僕もだ、モ一君!!米も錢もなくなつて仕舞ツたんだ

今朝食ふ米もないよ」

「ナニ君、今朝のお米もか」

「さうだよ、食はずに出掛よう」

儲もく我輩の呑氣に走をかけた呑氣坊主よな、今朝食ふ米もないから、食はずに出掛ようとは、面白し。

ドリヤ出掛よう、と二人は道々も世の馬鹿者共を嘲りながら三里半、やうく鐘城邑に着く、坊主奴、邑内第一流の宿屋に悠々と上がり込み、酒肴を命じて呵々大笑す、飲む飲む、恰も長鯨百川を吸ふが如く、忽ちにして徳利の算を舐す、坊主猶平然たり。

「オイ坊主、さう酒ばかり飲んで、○の用意があるのか」

「無い、ナニ大丈夫だ、ドウにかなるよ、アハ……」

「大分酔つて来たやうだ、モ―止し給へ」

「まだく、オイ酒が酒だ、下戸は駄目だ、此味を知らんから……之をチビチビ飲んでる間は、天下泰平サ」

午前十一時頃より午後六時、夕飯前まで獨酌廿七本を倒して平然たる酒豪も夕餉を済ますや、傍若無人の怪氣焰を吐き散らしつつ、何時の間にか、雷の如き高駟と化す。

翌早朝に眼を覺まし、亦もや酒を呼ぶ、我輩其傍に朝餉を

喰ふ、坊主何を考へ付きしか、ニコニコ笑ひながら、給仕の女中に小六ヶ敷用を命ず、臆かて女中の座を起つや急ぎ飯櫃を取り寄せて其中に手を差し入れ、大なる握飯二個を拵へて再び櫃を元の處に置きハンカチーフを出して夫れを包み、知らん振りしてまた酒を飲む、此坊主の仕業に一驚を喫したる我輩、朝餉もソコソコに済す、坊主例の握飯を取り出して、
「君、之れを持つて會寧に行き給へ、之れ丈けあれば生命には別條なからう。」

「ソリヤ大丈夫だが、君勘定はどうする」

「ナニ大丈夫だよ其方の心配は御無用だ、サア出掛け給へ」

出掛け給へ」

斯んな坊主と一所に居つては、何時如何なる面倒の起らんも計り難し、イザ出掛けよう、然し此坊主或ひは喰ひ逃げするやも計り難し、若しかくの如き事ありては一大事也、如かず此所の所轄憲兵隊に、事の次第を頼み置かんものと、憲兵分遣所を訪ふ、所長我輩の名刺を見て、

「今日お着きで御座ましたか」

「イヤ、昨日妙な坊主と一所に来て、昨夜はあの前の宿屋に泊まつたのですが、實は我輩も坊主も無一文です、今朝坊主め此通り握飯をくれてよこしましたが、若し喰ひ逃げでもされると、一大事だと思ひましたので、其事をお頼みに出ましたのですが、私が會寧に着きますれば、金が来て居る筈ですから、喰ひ逃げしても其儘にして下さい、勘定だけは私の方から仕拂ひますから、ドウか後

の所を宜しくお頼みいたします』

『夫れは承知しました、ちや君は直ぐ會寧に御出發ですか』

『直ぐに出掛けたいと思ひます』

坊主の事は分遣所に依頼して、順路漸く會寧に着す、雞林館の一室に鐘城の模様は如何にと、悠々として其消息を待つ事

二日二晩。

待てど暮せど何の消息もなし、我輩また何時迄も悠々たる能はず、此上は會寧分隊より、鐘城分遣所に電話をかけて、

其消息を明かにせざるべからず、宿を出でて會寧の町半ば、憲兵分隊に近付きたるに、會寧邑在住の日本人千二百餘名中其一流の神士とも認む可き人々の羽織袴にて、約八九十人の來るに會す、中に豫て顔知りの人々も居たれば、

『君等、ドコへ往くのですか』

『イヤ君、今日は鐘城から坊さんが來るので、迎へに行く所です』

『ナニ？、鐘城から………坊主が………』

若しや例の坊主ではあるまいか。

『では僕もた供致しませう』

『サアサア、ごうぞ!!』

此人々に連れ立ち、町端れに至ればハヤ百餘人程、路の両側に徒列して之れを迎ふ、サテは如何なる名僧智識ぞ、我輩兩三日鐘城を通過せし際、さる噂も耳にせざりしにと、思ひ惑ふ所へ静々とやつて來たのは、例の糞坊主!

『イヤ彼の糞坊主か』

『君、ソナ事言ひ給ふなア、アレハ本派本願寺の特派員文學士鈴木天戒と言ふ方です』

『ナニ、鈴木天戒』

一週間餘り全じ家に起臥して、彼の名前も知らざりしが今に始めて聞く、彼坊主符號、性は鈴木名は天戒也。

暫くしてまた例の坊主、我輩の宿に來り投ず、夫れより兩三日は坊主と宿を同じうして、快談時に夜の徹するをも知らざりしが、フト思ひ浮びたるは、鐘城の例の勘定問題也。

『時に坊主、鐘城の勘定は、どう始末をつけました』

『ムあれか、あれはなア、彼の家の子供が去年死んで、恰度一年忌の命日が来たので、夫れで僕がサ佛壇の前で、お経を讀んでやつた譯サ、所が君五圓包んで出してくれたが、勘定が七圓餘りあつたから、止むを得ず日本人十軒の家々を、悉く佛事供養して約十圓餘り寄せて、夫れで勘定して来たよ』

『へエー、世の中に坊主、丸儲けと言ふ言葉がありますか』

ぢや丸儲けをやつて来たのですな』

『マア其通りだよアハ………』

『どうだ君、坊主と言ふ商賣も面白からうが、殊に彼の握飯窃盗事件などは、極めて大妙計だらう』

呵々また大笑す、獨り我輩を座に残して、待てごも待てごも歸り来らず、早速宿の亭主を呼んで、

『オイ坊主はドコへ往つたぬ』

『ハイ先程御出發になりました、そして宿錢は貴下から頂

いて置き、武士は相見互と言ふ事があるからなつて、斯んな事を申して出掛けられました』

『オヤオヤ坊主奴、また丸儲けやつて行きやがつたなア、致し方ない僕が支拂ふ、そして今から僕も新豊山に行くから、道案内を一人呼んでくれ』

『へい承知致しました』

直ちに結束して、鮮人の道案内にて新豊山まで七里の山路に向ふ、時に零時半。

▲八百年前の古城址

會寧を出發して、七里の山坂路を新豊山に向はんとす、到底今は駄目なれば、明早朝に出發せよとは、宿の亭主を始め、會寧に於て我輩を知れる人々の止めたる所なりき、されど止められれば、止めらるる程、我輩の片意地は突張り出し、

『ナニ大丈夫です』

と會寧を出發すれば、豆満江の沿岸は徒らに巖石兀起して、加ふるに登り計りの山坂路。

『オイ鮮人、偉い路だなア』

『へい旦那、斯んな道ばかりです、迎ても今日は新豊山までは、行けますまい』

『オイ横着な事を言ふと拳だぞ、七里や八里の道が、半日あれば楽なもんだ、急げ〜』

『旦那、私は荷物を背負つて居りますから、之れ以上は急げません』

『ヨシ僕と一所に付いて来い』

と行けども行けども山坂ばかり、漸々午後四時絶頂に達したる時、會寧の邑内は眼下に在り遠く望めば、名も知らぬ山村水廓、淡く淡く煙の中に見ゆ、山頂には所々崩たれど約丈餘の石垣、周圍幾里往年の雄大なる面影を語る、先づ鮮人を呼びて

『此山の名は何と言ふか』

問へば、彼は少しにても長く休憩せんものと、鮮人には珍らしき學者振り』

「旦那、此山は雲頭山と言ひまして、八百年前に金の徽宗皇帝を擒にして、幽閉した之れが五國城です、此中には徽宗皇帝の矢の根で、『雲淵』と自然石に刻まれたのも残つて居ります、夫れから皇帝塚と言ひまして、皇帝を葬つた塚なども御座います、此中の畑地を掘りますと、其時代のものも少しは出るさうです」

「オイ鮮人、ぢやお前荷物を下して行つて、何にか掘つて來い、夫れから其雲淵の碑のある所を僕に教へてくれ」

「へイ、承知しました」

城廓内に這れば、中は耕かされて一軒の百姓家有り、鮮人は其百姓家に行く、我輩は雲淵の石摺りを作る。

鮮人は暫くして瓦二枚を携へ來り、

「旦那之れが、往昔の城の屋根瓦です」

「ドコから掘つて來た」

「思ひ附いたものですから、あの百姓から貰つて來ました」

見れば約二尺四方計りに、模様入りの瓦なり、成程珍らしき

もの手に入れり、よきお土産出来せり。

『サアまた出掛けよう』

と鮮人を促かして雲頭山を下れば、上水湖に出づ。

▲支那兵の亂暴を挫ぐ

上永湖は、支那領間島と、朝鮮との間にある渡船場にして
豆満江往來の便を圖る、されば渡船場の監視實に嚴重なり。
渡し場の途に憲兵派遣所ありて、常に憲兵上等兵二名監視
の任に當る

『一寸御伺ひ致します、僕等之れから新豊山に行きたいと

思ふのですが、今日日のある中に行けませうか』

『此所から君、新豊山までは、まだ三里餘りありますから

一寸日のある内には行けますまい、然し向ふ岸に渡つて

行けば、約一時間位で行けます』

『然し向ふ岸は支那領の間島でせう』

『さうです』

『私は御覽の通り、腰には刀を帯び、手には鉄砲を携へ、

斯んな武装した儘で、敵の内地に往つても好いですか」
 「サア、いけませんのですが、向ふ側は支那の守備兵が、
 一日一回巡廻する丈けですから、容易に君、逢ふやうな
 事もなからうよ」

「然し君、若し逢へばどうなる」

「其鉄砲と刀とを取り上げらるる丈けサ」

「之れを君、取り上げられでは、僕は非常に迷惑しますが
 元來僕の鉄砲は引金を引きさへすりや、彈丸が六つ出る

やうに、出來て居るのですから、グツグツ吐かしたら、
 やつつけて仕舞つても好いでせう」

「ウム好い、其覺悟さへありや……」

ナニ高が知れたチャンコロの、二人や三人グツグツ言はばや
 つつけてやるまでだ、ヨシツと膽玉据ゐた我輩、無法か大膽
 か、船を向ふ岸まで渡して仕舞つた。

山坂二つ越す迄は何事もなかつたが、ト見れば四五十戸の
 支那部落、彼方よりは三人の守備兵、

「しまつた」

モ—グヅグヅ吐かせば、やつつける迄だ、鉄砲には六個の弾丸を装填して、追々近寄れば、摺れ違へサマ道を開いて通した。

「ハハア何事も無かつた哩」

と十四五間行き過ぎた、後に聲在り、

「洋鬼撲殺 洋鬼撲殺」

守備兵三人の叫びに應じて、屈竟の壯者約三十人計り、手に

手に棍棒を携へ石を手にして追ひ来る。

聞く、支那人等由來人を殺すに、先づ石を以て傷け、然る後棍棒を以て擲り殺すと、好矣此の所を偽つて逃げ、彼の山の影に至らば片端より、枕を並べて撃ち殺しくれんと、町端より、山角の半ば迄逃げて来た、後に、

「哀號 哀號」

泣き叫ぶ鮮人の聲、見返へれば、後頭部より淋漓たる鮮血、サテはやられたなア。

「オイ貴様怪我したのか、早く先きに行け」

鮮人を先きに逃して、我輩其後を逐ふ、由來支那兵は、常に戦つて勝ちたる事なく、逃ぐる事に演習尤も努む、爲めに彼等の追跡愈々急にして再び三度、其手の身邊に觸る、最早絶体絶命也、此上は潔よく彼等に殺さるるか、一方の活路を開くか、其一を選ばざる可らず、唯恐る可きは彼等の銃器のみ銃器だに彼等の手になくば腕に覺わの柔道四段、ヨシ彼等三四十、一度に束になつて來るとも恐る可き我輩に非ず、突嗟

!! 意を決す 逆襲!!

大膽なる行爲は却て安全也だ、身を殺してこそ浮ぶ瀬もあれだツと身を挺して、其手許に飛び込むや、一本背負ひ、次ぎに来る奴には左腰、其次きには右腰と、入れる早業我れながら眼にも止まらず、數十尺の斷崖より地響打つて投げつけた、應がてチャブんと水煙。

「モ一占めたツ」

後の奴等棍棒位持つて來た所でドウなるもんか、イザとばか

り大手を擴げて立ち塞がれば、大將倒れて殘兵全たからず、先の勢は何處にか、逸足早く逃げて行く。

怪我せる鮮人を犒はりながら、漸く新豊山に着し、其夜は新豊山分遣所に一泊、翌くる日は下射地 次ぎの日は犁坪 西江村 梁永鎮と順踏、泊まりを重ねて、漸く茂山に着く、時は六月初めの頃也。

▲第二の猛虎を斃す

露、清、韓三ヶ國の國境横斷を企て、既に其半ばは成功し

たり、されど此所より、咸鏡南道惠山鎮に至る間は、白頭山麓約四十平方里の無人境を通過せざる可らずと聞く、イデヤ身心を静養し、大に勇氣を養はんものと、兩三日滞在に決す我輩の室は此旅宿の離れにして、往來に面す。

六月七日の眞夜中、狼狽しく衣戸を破れんばかりに叩く者あり、

「誰れだッ」

「僕だ君………白水君………湊上等兵だ」

「ナニ湊上等兵？……君どうしたのだ」

「虎が嘯いて居るよ……虎が」

「ナニ虎だツ……ヨシ今開ける」

表戸を開ければ湊上等兵也。

「マア君上り給へ」

「イヤ僕、今夜巡視に出掛けて、河東面まで行くど虎が嘯いて居るぢやないか、夫れから早速君に知らして上げようと思ふて、飛んで歸つて來たんだが、モ一君間もなく

夜明けだから、出掛けて見給へ」

「イヤ御親切有難う、早速出掛けましよう」

直ちに武装して宿を飛び出す、されど夜明けに近しとは言へ表は未だ薄暗らし、折柄黎明曉を破る大吼聲、確かに茂山川向ふの山の上!!

獵犬三疋に聲援を與へつつ、茂山川を徒渉し、目指す山の麓まで辿り着きしも、犬は虎の吼聲に恐れて、用を爲す者僅かにテフ一疋也 漸々山の五合目に達したる時、東天紅す、

遙に東の空を拜して「アハレ我れをして此の虎を撃ち取らしめ給へ、弓矢取る程の男の數に入らしめ給へ」と神に念ず。吼聲は止み、山奥深く狩り入りし愛犬テフの姿、何時の間にか茂山川向ふに在り、ウム彼れも虎に恐れて逃げ惑ふものか、噫!! ジョンの横死以來、汝一疋をせめてもの力と頼みしが、思ひ出してもジョンの横死、惜しき事をして退けたり、ジョンよ若し靈あらば、汝來りて此三疋の犬に力を籍せ!!

テフの平常柔順なるにも似ず、其動作極めて變妙也、暴ばれ狂ふ、聲を出して吠ね叫ぶ尋常一様ならず、何事ぞと來り見れば、礫河原に、濡れたる虎の大足跡、サテは最早山を下りて此方面に來りたるか、此上は追跡だつと、犬に聲援を與へて狩り立てたり、されど此附近一帶は人煙實に稀薄にして柴、禾木類密生し、到底人も犬も通ふ可き所だになし、或ひは道を開き、或ひは犬に聲援を與へ、あらゆる困苦、艱難、缺乏と闘つて、實に廿有五日目、始めて唐洞里に出づ、茂山

を東北に隔つ三十九里の山間也、時は七月一日午後六時。

されど人間の精力は、決して絶体無限でない、時に飲まず時に喰はず、或時は野宿と重ね重ねて疲勞一時に發す、犬共はと見れば其尾、其爪破ぶれて血を流し、苦闘惡戰の狀歴然たり、午後七時夕餉を濟ますや、犬共にも鶏卵三個宛を與へて勞を犒ひ、其儘横に成る、寢たワ寢たツ翌日午後一時迄、全く以て前後不覺なり。

朝晝兼帶の飯を濟まして、またもや犬を放つて狩り立てつ

つ、楡坪憲兵分遣所に着く同郷の友庄條上等兵ありて、懇切至らざる所なし。

「君、斯んな所までやつて來たのか」

「ウム實は虎を付けてやつて來たのだが、ドウも見失なつ

たらしいテ」

「ソリヤ残念な事をしたなアマア—兩三日緩つくりして行

き給へ」

「イヤソナ呑氣な事もして居られんよ、明日からまた山

行きた、然し今夜は泊めて貰はう」

と其夜は楡坪憲兵分遣所に、明くる日は鷹洞憲兵分遣所に一泊して、上蒼坪に向はんものと、イカルテキに差し懸るや、四五人の鮮人共何んとなく間の抜けた様な馬鹿顔して、長い煙管でブカブカやりながら、

「今朝嘯いた虎は、彼の山の邊だツたなア」

「ウムさうらしかつた」

と話す聲 フト耳に留まつた我輩。

「オイ何處の山で虎が嘯いた」

「ヘイ彼の山の邊で、今朝大層嘯きました」

「ヨシあの山だなア」

耳寄りの話に元氣回復し、モ一此の邊まで来て居るか、斯く聞く上は此方の者、ヤハカ撃ち取らずに置くものか。

「夫れツ」

と犬を放つて狩り立つる、テアの尾の振り方頗る急也。

『ドウヤラ居りさうだぞ、油断がならぬ哩』

獨言しながら銃身 確と握り締め、今にも飛び出さば、唯一
ト撃ちと身構へしながら登る、テフの追撃愈々急にして、山
一ツ越すよと見るや、ワンと一聲我輩の指揮を俟つ。

由來テフは獲物の有無を射手に知らして、後射手の指揮を
俟つ、獵犬として最も絶好の良習慣あり、我輩も急ぎ近付き
「ヨシッ」

一聲合圖を掛けて、身構ふるやテフはワンと草を蹶つて二三
間前に飛ぶ、續く兩犬もテフの後よりワンと吠ゆ、此時早く

彼時遅く草叢よりヤオラ身を起したる大猛虎!!

兩犬(滿洲犬)共の恐れて、逃げ得ざる奴をハヤクも引握
みアハヤ牙に掛けんすとす、此時早く撃つて放つた一發は確か
に命中、下腹部深く撃ち込んだ。

されど悠々晝寢の眞最中、テフの足蹶に夢破ぶられた虎は
銃音聞くと等しく「ウオー」と吼り、我輩目蒐けて飛び懸ら
んとす、刹那またもや放つた一發は、右肩部深く撃ち抜き、
續く一發もと釣瓶撃ちの早業、三發共に命中したれば、さし

も猛き大猛虎も、犬を引握んだ儘三尺ばかり、飛び上りて打ち斃る。

銃音鬨き付けて、馳せ來れる鮮人共に命じ、牛車に乗せ、悠々として翌々日茂山に引き上ぐ、時既に七月三日。

犬一疋は無残にも、虎の爲めに失ひたれ、目指す大敵を止しめ、再び茂山に静養を取る。

時に飛電あり、曰く白頭山を探險せよ。

▲勇躍して出發 探險の首途

由來、白頭山は朝鮮第一の靈山にして、朝鮮半島の首腦とも稱すべく、八道の形骸悉く此山より流れ出づ、海拔八千七百有餘尺巍然として、滿韓の國境に聳ね、四時白雪を頂く、殊に人跡を絶つ事、數千百年、人類の香に飢わたる、虎狼常に群を爲すと聞く、イデヤ、我銃の威力と、腕の力を試みんものと、手にはウキンチスタア—式自働六連發猛獸打銃を携

へ、腰には彈丸百五十發、モーゼル式自動六連單銃、祖先傳來腕に覺わの一刀を横へ、明治四十四年七月八日午前六時茂山を發す。

一方は、虎狼常に相臥すと、稱せられつつある重疊たる連山峻峰、巍然として雲表に聳え、一方は、獨流滔々たる豆満江の上流、其間に在る一筋道の、羊腸たるを辿る事七里半、漸くにして三下面憲兵分遣所に着く。

▲彈丸の錆にしてやる

分遣所長の厚意に依つて、其夜は一泊、翌朝七時、分遣所員に暇を告げて、出發せんとする我輩を、分遣所長は呼び止めた。

『君は何處へ行くのです』

『僕ですか、白頭山探險に行かうと思ふのですが……』

『ナニ君、白頭山探險？夫りや止し給へ、年年此七月頃には彼の山の麓に、馬賊が出て通行人に危害を加へたり、物を強奪したりして實に危険だよ、現に僕等昨年も態々

討伐に出掛けた位で危険だ君止し給へ』

『ヨシ馬賊が出たら、此銃の彈丸の錆にしてやるまでだから大丈夫』

『然し君油断がならんぜ、止し給へよ』

と熱心に、吾輩を思ひ止まらせようとする、厚意洵に多とすべきではあるが、一旦斯うと思ひ立つては、矢も鐵砲玉もたまらぬ、聊か狂氣ぢみた我輩の性質、遺憾ながら、誰れの言ふ事も採用出来ぬ、牢乎たる吾輩の決心、遂に動かす可らず

と見たか、

『では充分注意して行き給へ』

と別れた、此所より無人境に達する迄は、別に山と言ふ程の山もない代りに、道と言ふ程の道もない、極めて平凡な、高原地とき見る可き所を六里半、上流に遡ぼりて漸く農事洞に着す。

▲大風雨の無人境

此所より、威鏡南道の寶泰洞に達する迄、白頭山麓一体の

地、四十平方里は全くの無人境にして、農事洞は、戸數僅かに十一戸の寒村なり、今夜は洞長の宅に、南京虫と虱とに攻められながら一泊。

翌くれば、夜來の天候、何となく險惡にして、意地悪くも灰色の雲霧は、白頭山の七分を蔽ひ、山村水廓も辯する由なく、今にも降り出さんづ模様なり、然し雨位に屁占垂れて今日一日、此鮮人家屋に南京虫と虱とに攻められ、ゴロゴロして居るやうな我輩でない、直ちに出發の用意を整へて、此旨

を洞長に告げると、多數の鮮人等、約半里計り見送りくれた。夫れより二里程、無人境に突進したる時、俄然、險惡なりし天候は、風さへ加へ、唸りを生じたる一陣のストームは、無人境のすべてを掠め去つた、仰いで天上を望めば、依然として、濠々たる密雲深く山巔を罩めて、一分の綻も見せて居ない、ヨシ雨降らば降れ、風吹かば吹けつ、と糞度胸を据わたり我輩は、只管山麓を目標に、遮二無二突き進んだ。聽て五六里も來りしかと思ふ頃、果せる哉、一陣の強風は驟雨を誘

ひ、篠を突くが如き大雨、沛然としてやつて来た、見渡す限り廣漠たる無人境の大平野、雨露を凌ぐ可き、樹の一本だに無ければ、頭からツブ濡れの儘、約三里ばかりはひた走りに走る。と見れば、目前の大森林、天の助けと飛び込んで大木の下に雨宿る。

日の暮れ頃より追がに、烈しかりし風も漸く其勢を收め、雨も亦小歇みになりたれど、今宵は如何にして一夜の雨露を凌がんか、野宿せんにも、褥に代ゆ可き草は、雨に濡れて用

を爲さず、如かず、今宵は焚火の儘、一夜を明さんものと、比較的兩に濡れざる、燃料を拾ひ蒐めて、着換へのシャツ、一枚を犠牲にして、やうやうに焚火を拵らへ、着衣を干がしなごする中に、何時の間にか、夜は徒らに更けたれど、晝の暴風雨に引代へて、木枝鳴らす風だになく、追がに虚頂嶺の大森林も、寂漠を極めて悽愴の氣満々たり。

斯くて、静かなる一夜を、明かしたる今朝も、亦黒雲天を蔽ひ、唯さへ暗き森林の、一層暗澹として、今にも大粒の雨

降り出さんづ模様なり。

『儘よ雨の降るまで行ける丈け行けッ』
と獨言しながら歩き出す。

▲群狼に包圍さる

數千百年來、人跡を絶ちし、虚頂嶺の赤松の老幹古枝轟々
として、天に冲する千古の密林を、透遅として辿る、人の悲
鳴に似たるが如き、カケスの啼聲、風に争ふ、樹木の枝の音
など、一層寂漠の感を深うせしめ、隱凄幽寂の氣満々たり、

然かも虚頂嶺の通路は、猛獸だも満足に通ふ可くもあらず、
両側より蔽ひ被れる草は、路の見分けのつき難きまで生ひ茂
り、幾度か足を取られながら、漸くにして八里餘、粗末なホ
ツタテ小屋に着く、(多分鮮人等の鹿取り小屋なる可し)今日
一日氣遣はれし天候は、雨ともならず、風ともならず、暗雲
低く垂れたる儘に、日は全く暮れ果てぬ。

此小屋こそ雨露を凌ぐに、天の輿へ給へる屈竟の場所と、
昨夜一睡もせざりし疲勞の、軀を横にすれば、何時の間にか

眠りに落つ。

時は刻一刻と、夜半に近づく、折しもあれ、布を裂くが如き、物凄き叫喚、一聲聞えしと思ふ間もなく、愛犬等はワンと猛然吠いて急を我に訴ふ。

『スハ何者かの來襲ぞッ』

と枕元の銃を取つて、決然起き上がる間もあらせず、數百の群狼、物凄く吠えながら、一時にドツと來襲したり。

イテヤ我腕の力を試さん時節到來、ヨシ力の續く限り、彈

丸のあらん限りは、撃つて撃つて、撃ち抜きくれんづと、銃身も碎けよとばかり握り締めて、待つ間もあらせず、ハヤ數間の前に迫りたり、矢頃はヨシとばかり、群がり來る狼、目菟けて息もつかせぬ、釣瓶撃ち……。

夜氣、徒らに陰にして暗さは暗し、銃の照尺なぞ、定む可き由もなし、唯吠え叫ぶ聲を目當の乱射撃、されど銃は新式の業物なり、腕は多年の鍊磨なり、ヤハカ射損する事のある可なり。

銃聲は山に答へ、谷に鳴りて物凄く、群狼の吠は叫ぶ聲、亦森林を通じて山彦す、其騒然雜然たる光景、宛然百雷の一時に轟くが如く、一大修羅場と化して、悽愴の氣犇々として人に逼り、慄然肌粟を生ずるの感あらしむ。

幾百とも限りなき此群狼に向つて、限りある百五十の、彈丸全部を撃ち放てばとて、一方の血路だに開かん事覺束無し聞く狼は火を恐ると、如かず火を放つて此危難を免れんと突嗟、意を決したる我輩はポケットより、マツチを探り出し

て、小屋の内部に火を點すれば、炎々として燃へ上がる、奇計忽ちに功を奏して、群狼等何處ともなく退散す。翌朝死骸を檢すれば無慮十有八!!

▲白頭山麓に達す

群狼の重圍を破つて後二日間、相變らず大森林の晝猶夜の如き大下闇を縫ひながら、白頭山上の白雪を目標に、赤松の老幹を削りて『三石白水白頭山登山通路』と認めながら、廣漠たる森林に、無趣の歩みを運びつつ、七月十三日午後三

時、漸く白頭山麓に達す。

見上ぐれば、海拔八千七百有餘尺、巍然として、悠悠雲に聳ね、自れの高きを誇顔に見たり、ヨシ明日は登山して、已れを脚下に見下ろしくれんづと、意氣既に早く白頭山を呑む。

山麓の磊々たる巖石の間に焚火して、數日來の疲勞を醫しつゝ、登山の夢を見る、斯くて一夜を明かしたる、今朝はまたもや天候不穩なり、早朝より風は強く、雲の行足早く、見

る見る間に、黒雲天を蔽ふ、如何に朝鮮の雨期とは言へ、連日の降雨に氣も心も、腐れ果つる心地のせられぬ。

『ナニ之れから登山だッ』

と麓に一步踏み掛ければ、岩峭崎嶇たる直立系、満身の力を罩めて、樹枝に猿攀しつゝ、一步々々登り行く、胸を突くが如き急坂を登り盡して、とある岩角に憩ひつゝ天候を案ずるに、今にも降り出さんづ模様なり、糞ッ雨になぞ恐れて堪るものかと、またも登山し始むる折しも、大粒の雨は、ポツ

リくと降り出し、忽ちにして山上より、降り墮つる水は、直立系の急峻を瀑布と化し、足は徒に這べりて寸進尺退、身は屢々滑落して、幾千仞の深谷に轉げ落ちんとす。

かくて第二の急坂を攀ち登る頃には、雨は愈々烈しく風は益々猛烈なり、殊に灰白色のガスに似たる、奇なる濃霧は、吹雪の如く、前程に吹き荒ひて、何處を山頂とも山谷とも冥濛として見分けツケ難し、素より徑なぞと稱すべき徑のある筈もなき此山、マゴくして居たらんには、何時如何なる

災厄に逢はんも知れず、一刻も猶豫すべき時に非ずと、勇を鼓して暴風雨に抵抗しつつ、一氣に三町餘りを登れば、心臓の鼓動は破烈せんばかりに甚だしく身を震はして來た、而も弱味にツケ込む強猛なる風伯雨師は、更に一段の猛威を逞うしながら、我輩を急撃する、若し少しにても油斷したらんには、身は深谷に吹き飛ばされんは必定而も、行手は奇巖怪石の磊砢として遮ざるあり、猛雨は着衣のすべてを透して肌に泌み、奇寒骨を削らんとして恰も鐵の如し、進退此に谷まつ

たり、顧みて來路を望めば、漠々たる白雲鎖ざして、身は恰も雲の上に浮べるが如き心地せられ時々谷底より冷雲横ざまに捲き上げて、乱雹に似たる大粒の雨を浴せ掛ける、斯くても我輩は、猶登山せざる可らず、亦もや風は愈々黒くして、雨は愈々白き前程に登る。

登るに随ふて、天地は層一層晦冥、風伯雨師の咆哮益々激烈、身を横ざまに仆さんとして風物、眞に凄慘を極む、有撃の我輩も、今はハヤ絶体絶命『こりや困つた哩』と少々屁古

垂れ氣味、時は午後三時、身は人間を抜く事四千五百尺。

折柄巨砲を連發するが如き、雷鳴足許數間の所より起れるかと思ふまに、またまや頭上數尺の邊より起る。

あはれ、猛獸毒蛇も意に介せず、山嶽前に崩れようが、ビクともせざる我程の男も、今は頭上脚下に、雷鳴の挾撃を受け、加ふるに此大暴雨、登山すべき詮もなく、側ら數間の所にある、巖窟の中にもぐり込む。

考ふれば、山頂までは僅かに四千尺餘をあますのみ、我が

健脚に鞭打たば何程の事のある可きぞ、噫！空しく此風且雷鳴に弄ばれて、此巖窟に今日半日を過す事の、如何に意氣地なきよ。

瀧の如く流るゝ、雨滴に濡れし着物を脱して之れを絞る、奇寒また肌を襲ふ、雷鳴暴風共に依然として、穴の外には物凄き唸りを聞く、夏とは言へ白頭山の中腹に裸体のまゝに一夜を明がさゝる可らざる也。

▲白頭山頂を究む

雷鳴に、暴雨風に、進退共に谷つたる、一夜を火の氣一つなき巖窟に明かし、朝寒の身に泌む頃、驚いて目を覺まし、蹶然として、穴を遣ひ出づれば、夜來の風雨は、名残なく晴れて、紺碧の空は拭ふが如し、星まだ明き午前二時探見電燈を點しながら、高峭峻險なる乱巖の間を攀ち上る、七寸の鞋若し一步、踏みはづさば、無論五尺の肉塊は、俵を轉がすが如く、雲の海に墜落するは覺悟の上、漸々登り登りて、山の八合目頃に達す、之れより上は残んの雪未だ消にもやらず。

雪に踞して遙か東方を眺むれば、昏黒なりし空は、其底に一道の紫氣を染め出し來りしよと、見る間に忽ち紅色を帯び忽ちにして五彩の光線、幾万里に搖曳し、聽がて渥丹の如き一大火輪躍如として現はる、天地始めて鮮明、下界の山川指呼の間に見ゆ、豪快の氣大に發揮して、海の如く浩然として胸中一微塵の悶事あるなし、爰實に海拔七千餘尺、天地寥廓として、悠遠崇高の念犇として起り、身は恰も幽玄界に、誘はれ行くの感あり。

見よや、明らけき自然の大地圖を、其如何に雄大なるか、我輩もう神氣亢進して靜座するに忍びない、銃身碎けよとばかり握り締めて杖つきつゝ、雪を踏んで白頭山頂に達す、怪巖奇石、累積して自ら虎躍り龍馳するが如く周圍約十五六丁水深幾千尺の大湖あり、恐らくは太古の噴火口に湛へし水なる可く、水は物凄きまでに碧く、水底如何なる怪物の潜み居るかを怪しましむ、名を龍王潭と言ふ。

海拔八千七百有餘尺の絶頂に達し、眸を放てば、天我が爲

めに、今日一日の晴を開きたるか、朝鮮の山川、一眸の下に集まる、諸山悉く撫するに足り、馳望の豪絶壯絶、我に於て始めて知る、仰いで天を眺めば碧漢萬里、一片の雲もなく、山上稀に見る好晴也。

目を支那側に轉せんとすれば、山頂徒らに風強くして久しく止まる能はず、遺憾ながら山靈に暇を告げて下山せざる可らず、聞く明治四十四年七月十五日まで此山頂を極めたるもの、我人共に僅かに三人あるのみと、一片の好奇心ムラ〜

と起り、巖面に『三石白水山上を究む、明治四十四年七月十五日爲記念』と書して、サテ身邊を顧みるに、何等記念とすべきものだになし、折柄の催し物、ウム之れ也とばかり、直ちに尻をまくつて累々と脱糞す、海拔八千七百有餘尺、白頭山の絶頂に脱糞して、伏して夫れに向つて祈つて曰く、『汝若し靈あら、ば化石となりて三石白水が登山の記念となれ、若しまた化石となる能はずんば生きて其臭氣を千載の後まで傳へよ喝!!』と斯く言ひ終りて、山靈に暇を告げて再會を約

し、名残惜しくも山頂を辭す。

▲熊一二頭を屠る

時既に北朝鮮の雨期にして、連日連夜降り切る雨の鬱陶敷唯さへ淋しき無人境の森林は、暗澹として寂莫を加へ、悽愴の氣満々鬼氣犇々、と人に迫る、山頂を辭してより十七日目漸々白頭山の東北麓に達す
時に湧然として、流れ出づる一靈湯、
『ヤア温泉だ………』

是れ實に天與の一靈泉、茂山以來絶わて久しく湯浴もせず、殊に無人境に入りて第二日目、狼の小便に汚され、十數日間連日連夜の雨晒らし、心地悪しき事限りなし、ドリヤート風呂浴びてやらんと、手頃の松の枝を切り取り、浴槽を掘り始む。

直徑三尺深さ三尺計りの穴を掘り、湯の満つるを俟つて、雨に濡れし洋服、汗に穢れしシャツ等、一々洗濯して浴槽に飛び込めば、頭部は雨に打たれて、冷静に冴え、湯は体温を

保つて心地よき事限りなく、何時の間にかウトウトと眼氣を催し、湯槽の中に居眠る。

俄然襲間の所に、猛然犬の吠ゆる聲、フト目を覺ませば、二頭の巨熊!!

呀ツとばかりに、飛び上り真禪の儘銃を押し取り、大喝「熊」ツと一聲。例の

『ガアー』

を連發しながら起ち上がる、見れば咽喉部に月の輪のある黒

熊也、ウム彼の月の輪だに、撃ち抜かば、唯一發の許に斃れる筈、ヨシツと狙ひを定めて撃つて放つた一發、月の輪反れて胸部深く撃ち込んだ。

されど由來神經遲鈍にして、彈丸に抵抗力強き熊は、倒れんともせず、再び『ガアー』と起ち上がる、撃ち損せしか然らば今一發と切つて放てば、漸く其所に打ち倒る。

然し其背後に在りし熊は銃聲に怒りて、我輩、數歩の前に押追つた、此奴ツと一步踏み出し、銃口差し向くれば、アナ

ヤと見る間に銃身ムンツと引握み、奪ひ取らんとす、最早や斯く成る上は、最後の手段、引組んで命のやり取りするより外になし、銃床を左手に持ち代へて、右に一步寄るや、右足を飛ばして刀の鑢に拇指を引掛け、力に任かして引寄すれば鞘走りたる刀身、天の助けと拾ひ上げ飛鳥の如く其懐に飛び込み、グサとばかりに突き込めば、流石の熊も『ガァー』と一聲、其手にせる銃を投げ捨て、握み掛らんとす、此時早く、拾ひ上げたる銃の狙ひ定めて、ズドンと一發切つ

て放てば、見事に急所の命中、聲も立て得ず、打ち斃る。

『占めた、ドリヤ皮でも剥がう』

山刀の鞘を拂つて、其皮を剥ぎ、生肉を喰て其美味を賞翫す凡て熊、鹿の如きは其生肉非常に、美味なる者也。

再び浴槽に飛び込みて沐浴多時、先きに洗濯し置きたる洋服を着込み、生血滴る皮を提げ、廣漠たる無人境を、磁石一ツ力にして、虚頂嶺の大森林を彷徨ふ事八日にして、始めて老幹を削りて、『三石白水白頭山通路』と認めたる大木の許

に出づ。

▲豹と格闘す

白頭山の探見に、既に二十有餘日、風伯雨師と戦ひ、或ひは群狼に襲はれ、或ひは熊と闘ひ、道もなき無人境に彷徨して、漸く此所まで辿り着く。

『モー之れからは目標のある答、ヤレヤレート安心した』と雨に濡れし煙草を取り出して、火を點せんとする時、我輩を隔つ數間の所に、忽然現はれたる巨豹!!

テフは猛然起つて挑まんとする時早く、驀然狂ひ懸つて引握み、アハヤ其爪牙に掛けて屠らんとす、我輩打ち驚き、直ちに一發ズドンと火蓋を切れば、豹の下腹部薄く撃ち抜きたり、南無三ツと第二發目を放つ間もあらせず、アナヤと見る間に、犬を捨て猛然吼り狂ひて飛び込み様、横下腹部に喰ひ付き、右手に首筋を握み、左手に頭部を引握む、道がの我輩も堪へ兼ねて横さまに打ち倒れた。

されど、我程の男の兒、ムザムザ豹の餌食とならん事口惜